慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宋元刊南北史・七史および隋書について(下)
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.301- 344
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0301

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋元刊南北史・七史および隋書について（下）

尾崎　康

三　七史

南宋前期刊本

南北朝の七史の版本は、宋元版としては、かねて眉山七史と称されてきた南宋前期杭州刊本しか現存しない。前述の北宋後期にはじめて刊刻されたものはもちろん、郡斎読書志巻五（袁本 巻二上）に紹興一四年四川漕井憲孟刊という眉山七史も、その後の書目書誌類にさえまったく姿を見せず、元の九路儒学刊十七史も実は七史を除く十史のようで、元代には七史が新たに開雕された形跡もないのである。そのために、ひとり眉山ならぬ杭州刊本が、三朝本といわれるように元・明代にも補刻を重ねられつつ、果ては明の南京国子監の二十一史の各一として、万暦一〇年代（一五八〇年代）まで実に四〇〇年の間も印行された。その間、とくに明の南監では嘉靖七～一二年に大規模な補修を行って二十一史を整え、以後もときに補刻を加えながら万暦までかなり印行したらしいから、七史の嘉靖修本はさほど珍しいものではなく、現在も各所に架蔵されている。

しかし、嘉靖までですでに三五〇年、それでも七史の需要は乏しくてあまり刷られることがなかったのか、南雍志経籍考の嘉靖七年現在の南監所在の版木数の記載には、いずれも欠数が二～八面で、南史の一三〇をはじめとする他書より意外に少い。そこには七史はみな一種づつで、それまでこれがやはり唯一の版木であったらしく、以後、刷りを重ねて万暦に至るとさすがに漫漶が甚しく、ついに使用に堪えられなくなったのであろう。南監では万暦（二～）五年に梁書、一六年に陳書と周書、（一〇～）一七年に北斉書、（一六～）一八年に南斉書、（二〇～二四・）二五年に宋書と魏書の順に七史の新版を開雕した。梁書と他の六史とに一〇年の隔りのあるのは財政上の理由によろうが、その間にも旧版に補刻して印行していたらしく、蓬左文庫蔵の宋刊魏書に万暦一六年の補刻葉が混っている。なお、北京国子監本の七史の刊刻は、万暦二四～三三年である。（明南北国

眉山七史については、よく引かれるが、郡斎読書志巻五の宋書の条にあるものが唯一の資料である。嘉祐（一〇五六～）・治平・政和（～一一一七）と半世紀もかけて、七史がようやく刊刻されるに至る経過を略述し、「頗之学官、民間伝者尚少。未幾遭靖康丙午乱、中原淪陥、此書幾亡」といい、かつ

紹興十四年、井憲孟為四川漕、始檄諸州学官、求当日所頒本。時四川五十余州、皆不被兵。書頗有在者、然往往亡闕不全。収合補綴、独少後魏書十許巻。最後得宇文季蒙家本偶有所少者。於是七史遂全、因命眉山刊行焉。

とあるものである。晁公武は四川転運使の井憲孟のもとにおり、その蔵書を多く贈られたというのであるから（郡斎読書志序　四庫全書総目提要）、この事実を疑うことはないが、明清以来の蔵書家はほとんどすべて、伝存の宋刊七史をこれと同一視し、眉山刊本あるいは蜀大字本と称してきた。明南監で長く刷られたせいもあって、諸書目・書誌には、七史の一つづつについて眉山と称する記事は枚挙にいとまがない。

しかし、その明南監にあったことから疑問が持たれ、王国維・趙万里・長沢規矩也・潘美月・阿部隆一の諸氏によって、それが否定され、江浙刊本説が唱えられた。

王氏は、五代両宋監本考 ではその根拠を示さなかったが、伝書堂蔵善本書志（一九二二年序）の宋書の条では、玉海の「紹興九年九月七日、詔下諸郡、索国子監元頒善本、校対鏤板」の記事を引いて、南宋初の江南で国子監本が刊刻されたことを明らかにし、この七史の板が元の西湖書院にあり、明の南監へ移されたこと、当時の江南刊の大字本の実例を示すことによって、七史もその一であるとする。

趙氏も汪説を承けて、宋の南渡後、監本、とりわけ正史類が多く江淮一帯の諸州郡で刊刻されたこと、九行本七史が北宋監本の覆刻であろうことを指摘し（館蔵善本書提要　南斎書五十九巻　北平　一九二九年）、さらに詳説して、この七史が元代に西湖書院、明に南監に伝えられ、南監の諸版には蜀中刻本がないこと、字様が眉山本（小字の冊府元亀・国朝二百家名賢文粋・東都事略、大字の蘇文定・蘇文忠・秦淮海・陳后山・洪盤洲全集）と異り、浙本に近いこと、梁書の重修刻工に浙人（龐知柔・曹鼎・童遇）がいること、の三証を挙げられた（両宋諸史監本存佚攷　中央研究院歴史語言研究所専刊一　慶祝蔡元培先生六十五才記念論文集　上冊　一九三三年）。第三点によって、少くとも南宋の補刻時までは遡って江浙説を確定されたものである。

この間にあって張元済氏は、雙鑑楼蔵の南斉書の跋に眉山七史の一としていたが（図書館学季刊四―三・四　一九三〇）、百衲本二十四史を編纂して、宋書の版心に元の至元一八年杭州と明記する補刻の年記を見つけ、さらに宋慶元沈中賓在浙左所刊春秋左伝正義の刻工と同じ者を三三名も挙げて、南宋中期には浙江において補刻が行われたこと主張しながら（百衲本宋書跋）、その後に校史随筆に「蜀大字板在南宋時入浙」と題したように、あくまで眉山刊にこだわって「蜀中紹興原刊、余則入浙」と考えられた。字様の「遵歛」なところ、版心を五格に区分するところが蜀刊本の

特徴であるというのである。

これを批判されたのが長沢氏であり（宋代合刻本正史の伝本について 滝川博士還暦記念論文集 東洋史篇 九五七年）、その論点はやはり刻工と字様とにある。ただし、宋代刊刻葉の刻工として対照にされたのが南宋中期補刻葉のもので原刻刻工に触れず、その点では張氏以上には根拠の提示がない。むしろ、遠隔なことと刊刻の中心地の蜀から運びだす必要性を疑われることとから、版木の移送を否定される。字様については、張氏が世間伝うるところの蜀本と同じく一派に出るとはいうものの、真の蜀刊本（慶元中成都府路転運判官蒲叔献刊本太平御覧・太平寰宇記・景文宋公集・十巻本論語註疏・周礼等）とは異り、実見された静嘉堂蔵の陳書はむしろ杭州刊本に似るとされる。静嘉堂の陳書は原刻の残葉がかなり多く、それは杭州刊本の字様と思われるが、一般にこの七史本の現存の原刻葉は後印のためすでに文字が摩滅して肉が削れ、いささか蜀刊本に似てきたふしのないでもないことが、張氏に誤解させたかも知れない。しかし氏にはもちろん原・補刻の認識は明確であったものの、当時の刻工名についての知識では、原刻刻工の浙刊本に共通する者がほとんど見当らず、むしろ後に触れるように蜀刊太平御覧などの方に同名の者が目立ったためであろうと想像する。長沢氏がもう一歩、原刻刻工の対比に踏みこめなかったのも、刻工表の作成に努力を傾けられたにかかわらず、なおそれが適わなかったからである。

潘氏も史料・字体・刻工の三点について、とくに後二点について 張元済蜀中原刊説之誤 伝世七史刻於臨安之証 を説く専論で、かつもっとも長篇なので採りあげたが（南宋重刊九行本七史考 故宮季刊四―一 一九七三）、ここでも宋刻葉を原刻と補刻とに分けて考えられず、致命的な欠陥となっている。張氏がすでに慶元、すなわち南宋中期の補刻は浙江に運ばれてから行われたとしているのであるから、補刻はもはや問題の対象とはならず、原刻葉を区別してそれについて論じなければ意味がない。まず字様については、典型的な蜀・浙刊本の書影を大きく掲げて魏書の二葉と対比、証明されるのは妥当であるが、魏書の第二葉は南宋中期修葉である。刻工については、百衲本のほかにその底本ともなった北平図書館本を五部ほど実査されたらしいうえで、詳細な刻工表・同対照表を二つ提示して証明を試みられたが、その努力がほとんど徒労に帰している。氏は張氏のいう 版心画分五格者 をすべて採りあげ、ごく一部に初期・中期の別を与えているものの、七史の原本について原刻かどうかを判断しないのである。そのために、採録の大半の者が論議以前の補刻刻工であり、せっかく中国版刻図録を用いてその杭州刊本とするものと対比された者が七史ではすべて補刻刻工である。それより版刻図録は、かれらを南宋中期江浙地区良工のように明記しているはずである。七史の原刻刻工は後述するようにあまり他書に見えないからこの対照表には登場しないのであるが、したがって浙刊説を証明することはたいへん難しいことなのであるが、表に提示されたものは、ごく一部が南宋中期刻工と同名であるほか、洪新・蔡郛のただ二人の例外を除くすべてが、長沢規矩也宋刊本刻工名初稿、金子和正天理図書館蔵宋刊本刻工表 と合うと

するものばかりで、その両表のうちの南宋前期杭州刊本のものと同一人であるという指摘はさったくない。両表にはむろん南宋前期杭州刊本がいくつか含まれているのであるが、そのもっとも肝心な点の認識が欠けているといわざるをえないのである。

この原刻刻工をはじめて問題にしたのが阿部氏で、それらを六三名も採録したうえで、広範に実査した多数の宋刊本のものと対比し、その約三分の二が南宋前・中期杭州刊の約三〇種の諸本にも見えることを証明された。すなわち、六三名中の二三名が、紹興刊の新唐書、思溪版大蔵経以下の三〇書の刻工ともなっており、その大半が紹興～嘉定間、つまり南宋前・中期の杭州圏内の刊本であること、蜀刊本とされるのは慶元刊太平御覧、南宋前期伝眉山刊蘇文忠公文集（南宋前期広都裴氏刊六家文選の修もか）にすぎず、そこに合致する四名の三名までが同時代の他の浙刊本にも見えることを、実例を列挙して証明し、七史が孝宗朝期（南宋前期）の杭州刊本であることを強調されたのである。刻工名、およびその諸書のものとの対照は、後に表示するが、これによってこの問題にはほぼ決着がつけられたといってよかろう。

私は、同姓同名も珍しくないことであるし、一人二人の刻工が合うことも大いに参考にするが、せめて四、五人が共通しないと決定的といえないと考える。それで刊年の定かな大蔵経を重視し、この七史についても思溪版との五人の合致を指摘したのであるが、さらに開元寺版とも四人が合うことがわかった。開元寺は福州であるが、その刻工は江浙刊本をもしばしば手がけている（宋元刊三国志および晋書について斯道文庫論集一六輯 一九七九年）。

記述が前後したが、この七史は九行一八字の大字本で、行格など版式も全体の構成の形式もほぼ等しい。南斉書の巻末に、

崇文院
嘉祐六年八月十一日
勅節文宋書斉書梁書陳書後魏書北斉書後
周書見今国子監並未有印本宜令三館秘閣
見編校書籍官員精加校勘同与管勾使臣選
択楷書如法書写板様依唐書例逐施封送杭
州開板
治平二年六月　日

という治平二年の杭州での開板の牒文がある。また、南斉書など四史に曾鞏らの上書敍録が三ないし四葉、いずれも目録に続けてあり、版心にも目録（魏書は目録序）と題し、丁付も目録から通して付けられている。校点本はこれを巻末に移し、曾鞏南斉書（陳書）目録序・旧本魏書（周書）目録敍などと題する。これらに名を連ねる三館秘閣の校勘官は、姓を名乗らないからその部分は推定になるが、南斉書に□恂・（丁宝）臣・（鄭）穆・（銭）藻・（孫）洙・（孫）覚・（趙）彦若・（曾）鞏の、陳書に右のうち（丁）宝臣を除く七人、魏書に（劉）攽・（劉）恕・（梁または安）燾・（范）祖禹、周書に（梁または安）燾・（王）安国・（林）希である。梁書のこの本にはないが、武英殿

版に曾鞏序があるのは元豊類藁から採ったのであろうと、張氏は推察する（百衲本梁書跋）。

この上書敍録に「臣等因校正其訛謬」（南斉書）、「其疑者亦不敢損益、特各疏于篇末」（陳書）というように、一部の巻の末に疏語があり、当時の校訂の結果の本文の疑義を提示し、ときに按語を記す。これが宋書に二、南斉書に一〇、梁書に四、陳書に七、魏書に二七、北斉書に一六、周書に二条あり、三九〇字に及ぶもの（魏書巻三）から、三字のもの（南斉書巻七）までである。張氏は百衲本の七史の各跋にこれについて触れ、校史随筆にはだいたい「巻末疏語」の題をもってそれぞれ各一節を設けているが、宋書などでは「本書百巻、而疏語僅此二条、必有欠失己」と、その少いことを疑っている。それというのも、この疏語が明の南北監本・汲古閣本、清武英殿版に出入異同が多いからで、南斉書では存一〇条のうち、A 2条は同文が各本にあり、B 四条はこの宋本と汲本にあり、C 四条はこの宋本だけにあるとされる。これらを校点本（中華書局版）について見ると、Bのうちの二、Cのうちの一条の本文は、宋本のものとこの疏語を欠く諸本のものと異っており、その各一条は校点本の校勘記が明清刊本の方を是としているから、主として南監本等が校勘の末に本文を改め、その結果、疏語が不要となって削除したものと思われる。

しかし、現存南宋本七史では魏書と北斉書に疏語が異常に多いのは、魏書の疏語の大半は「魏収書亡」または「亡」に始っており、北斉書の大半が「此巻与北史同」の六字であるからである。すなわち、北宋代のこの書の校訂・刊刻の際に亡佚して整わない巻が少くなく、それを北史等をもって補ったために、その旨を注記したものである。両書ともそのほとんどは一巻のすべてが失われたが、なかには史臣論など一部補入の巻もある。

校訂に際して欠巻補充のために用いられた他の諸史は、この疏語によれば、北史を主とし、魏澹史・高氏小史・修文殿御覧・隋書の論賛であるが、魏澹の魏書（隋書経籍志「後魏書百巻著作郎魏彦深撰」・旧唐書経籍志「魏書一百七巻魏澹撰」・新唐書藝文志「魏澹魏書一百七巻」）、高氏小史（新唐志「高氏小史一百二十巻高峻、初六十巻、其子迥釐益之。峻、元和中人。」）、修文殿御覧（隋志「聖寿堂御覧三百六十巻」・両唐志「（祖孝徴等）修文殿御覧三百六十巻」）もおそらく北宋に亡んだ書であって、この佚文の存在は貴い。

七史のそれぞれに、かなり早い時期からの欠葉・欠文、あるいは墨釘・空格の多いことも、百衲本および校史随筆に指摘されている。

宋書巻四少帝紀は、第四葉を欠き、次葉に史臣論の結尾語一行だけが存する。北監本・汲古閣本・武英殿本等は、南史に拠ってこの間の二二〇字を補っているが、第三葉末までの前文に直接は繋がらず、また沈約の史臣論は南史からは収録のしようがない。校点本は、さらに冊府元亀巻一八八帝王部から前文に続く五九字を採って増補しているが、この終りが南史からの文に連るかは定かでなく、史臣論はここでも補いようがない。こ

の冊府元亀と南史の計二七九字が、そのまま宋書の文と同文であるか保証できないが、仮にそうであるとして、宋刊本の行格の一葉一八行・行一八字に当てはめると、一六行（一五行と九字）になり、欠一葉として史臣論のスペースが二行分だけ残る。南史の本文からみて、宋書も本文と論賛でもう一葉とるとは思えないから、欠葉はそれだけで、史臣論は残存分も含めて三行程度とせざるをえない。史臣論がいささか短いようではあるが、宋書では、創業の武帝紀が二巻・全七三葉を要して一六行、孝武帝紀が三四葉、順帝紀が九葉で、ともに三行半であるから、わずかに四葉強の、在位二年の暗愚のこの廃帝については少すぎることはない。なお、この一葉は現存本でもっとも早い明の礼部官書であった明初印本ですでに欠葉である。

南斉書には、宋刊本のちょうど一葉分が明清刊本に欠落した場合が、巻一五（志七）第三葉と巻三五（伝六）第一〇葉のところにある。この葉は、百衲本の底本の明礼部旧蔵・中央図書館現蔵の明初印本では、それぞれ原刻と南宋中期修とであるが、それ以後の嘉靖一〇年前後の修本では欠葉となっている。その間に版木が失われて、そのまま南北監本・汲本・殿本等も復元できなかったものである。なお、南斉書では、明初印本ですでに巻四四（伝二五）第六葉・巻五八（伝三九）第五葉が欠葉となっていて、これは全本が補えないままにある。魏書巻一六（伝四）第一六葉なども同様である。

梁書では、張氏は「宋本多墨丁空格」と題し（校史随筆）、墨釘三六・空格九があるとし、「後出諸本、補完無欠、大都采自南史」という。墨釘の箇所は百衲本についてざっと数えると四二に及ぶが、それはともかくとして、これらがほとんどすべて元修葉にある。元代のかなり大規模な修補の際に、おそらく原刻版木の漫漶が甚しくて、校正が十分に行えなかったためであろう。

ただし、やはり張氏が「宋本欠文」で指摘しているが、巻二〇陳伯之伝第八葉の欠一九字のところは、原刻で刻工は余恭である。ここに挙げられた三例は、いずれも宋本・汲本が一〇字以上を欠くものであるが、監本・殿本は南史に拠って補い、校点本もこれに従いつつも校勘記になにも触れない。

七史とも巻頭首題は、宋書を例にとれば、

「本紀第一（隔四格）宋書一

臣沈　約新撰」

のように大題を下に、小題を上にし、第二行に撰者の名を記すが、魏書には目録以外に魏収の名が見えない。

匡郭はすべて左右双辺、大きさが縦二二センチ台・横一七センチ台。原刻葉の版心はやや広めで、線黒口・魚尾がなくて横線で五格に仕切り、第二格に「宋書紀一」のように題を、四格に丁付を、五格に刻工名を記す。これは宋刊本でも特徴的であるが、ほぼ同時期の両淮江東転運司刊三史のうちの漢書だけが同様である。補刻にもこれをまねるものがあるが、あるいは白口とし、あるいは字数を刻している。これらをもって眉山刊・杭州刊の考証をしても無意味なことは、前述した通りである。ただし、

補刻葉の版心は多種多様であるが、その大半は単魚尾または双魚尾に変っている。

原刻の字様はすべてすっかり摩滅して宋代の面影を失っているが、大字なだけに往時を偲ばせるものを残し、漫漶が甚しくても後修葉と区別させるだけの風格をなお備えている。ただ肉が落ちてすっかり痩せてしまったために、張氏にあくまで浙刊と思わせなかったのであろうが、それだけに蜀刊本の鋭さもない。

刻工名は、まず原刻のものに限り、七史に分けて表示する。直接、原本から採録したものを○、百衲本によったものを●と区別して示した。影印本では原刻と必ずしも断定しにくいものがあり、また百衲本には加筆修正されたものもあるからである。

	宋	斉	梁	陳	魏	北斉	周
3 下開					○		
万六						●	
4 王千	●		○				
王大方				●			
王川					○		
王才			○	●	○		
王世華					○		
王亢					○		
王友	○						
王太			○		○		
王丙				○			
王右	○						
王生		○					
王全		○				●	
王冲	●						

	宋	斉	梁	陳	魏	北斉	周
王圭					○		
王有							○
王利和					○		
王廷			○		○		
王志			○				
王周						●	
王庚					○		
王昇(升)			○	●			
王昌			○	●			
王祖			○	●			
王真						○	
王信						○	
王祖			○	●			
王能				○		●	
王欽			○			○	
王堪			○			○	

	宋	斉	梁	陳	魏	北斉	周
王智					○		
王華					○	○	○
王賓					○	○	○
王道							○
王諒					○		
5 史忠					○	○	○
田力						●	○
田下						●	
田召					○	●	
田永						○	
田立						○	○
田芽						○	
6 任己						○	
任王真						●	
任亨(壬)						●	

	宋	南斉	梁	陳	魏	北斉	周
任宗					○		
任昌						○	
任章						○	
任欽	○		○	○	●	○	
任達			○				
任顕			○				
朱太			○	○			
朱右				●			
朱言			○	○	○		
朱通	○				○		
朱善			○				
余心[7]	○						
余恭			○				
余貴	○			○	○	○	
呉明				●			
宋全					○		
宋彦					●		
洪新[9]						○	
家宗[10]					●		
袁民				○	●	○	
張与[11]					●		
張仁				○	●	○	
張国					●		
張林			○				
張禹			○	○			
張善			○	●	○	○	
陳立				○	○	○	
陳智	○			●			
単亨[12]					●		
単昇					●		
程昇（呈升）					○		
馮会					●		
黄文					○		
楊丈[13]			○				
楊和			○	○	○		
趙旦[14]					●		
潘正[15]			○		●	○	
潘亨					●		
蔡中					●		

千 巳 六 升 元 文 壬 王 右 史 朱 田 石 立 冲 牟 全 宋 言 宗 周 忠 秦 祖 張 華 善

智 隆 楊 詹 禄 趙 賓 潘

避諱欠筆は、原刻で原本から直接に確かめたものに、
玄 朗 珽 敬 驚 警 弘 殷 匡 竟 境 胤 恒 暄 貞
徵 樹 桓 構 慎 にあり、百衲本によれば、右の他に 炫
懸 縣 鏡 恇 禎 署 属 豎 にも見られる。すなわち、孝宗
の 慎 にとどまる。これに対し、南宋中期修葉では 敦 燉 廓
にまで行われている。

さて右の刻工を南宋諸刊本の刻工と対比して、南宋前期杭州刊説が打出されるわけであるが、その阿部氏の具体的な例示をやや増補して、次に一覧表に整理してみた。

厳密でないが諸書をほぼ刊年の順に並べ、それを大きく崩さない範囲で、同じ書名・同じ刻工名はなるべく纏めるようにした。

蜀刊本は別に集めて、南宋前・中期刊本と同後期刊本との間に、行を空けて掲げた。

刊とある場合の刻工は原刻、さらに修とある場合の刻工は補刻の刻工である。

刊年・刊者の下の小字は、調査本の別称・所蔵・影印本や書誌から採録した場合のその書名などで、多くは次のように略称を用いている。

静　静嘉堂文庫　宮　宮内庁書陵部　足　足利学校遺蹟図書館
北　北京図書館　中　台北・中央図書館　北平　同・北平図書館旧蔵
故　台北・故宮博物院　歴　台北・中央研究院歴史語言研究所
百　百衲本二十四史　四　四部叢刊　宝　宝礼堂宋本書録

書名	刊年・刊者
	七史と共通の刻工
開元毗盧大蔵	宣和六・紹興一八福州刊　王才　王太　王生　陳立
思溪円覚大蔵	紹興初　湖州刊　王昌　王真　王祖　王道　陳立
呉書	南宋初期刊　所謂嘉祐本　静　王周
同	同　同前期修　王太
(旧)唐書	紹興　紹興府刊　北百　王升　王圭　王昌　王華
(新)唐書	紹興　湖州刊　静百　王昌　王真　王祖
同	同　南宋前期修　王昇
史記(集解)	南宋初期刊同前期修　所謂景祐本　歴　王華
史記(集解)	南宋前期刊　中　王友
史記(集解)	南宋前期淮南路転運司刊　北宝　王全　王華
漢書	南宋前期両淮江東転運司刊　洪新
漢書	紹興　湖北茶塩司刊　静　王亢
同	同　淳熙修　張善　蔡中
文選	紹興　明州刊同二六修　宮　王諒
唐百家詩選	紹興刊　静　王華
本草衍義	宋刊南宋前期修　宝　張仁
淮海集	乾道九高郵軍学刊　内　中　潘正
類篇	影写南宋前期刊本　故　宋彦
北山小集	南宋前期刊　中　王昌
東坡先生奏議	同　中　黄文
元氏長慶集	同　静　潘亨
論衡	同　宮　洪新　潘亨
史記(索隠)	淳熙三桐川郡斎刊　静　洪新　潘亨
春秋経伝集解	紹興　江陰軍学刊淳熙修　陽明　潘亨
春秋経伝集解	淳熙　撫州公司庫刊　故　王才　王全　呉明
通鑑紀事本末	淳熙二厳州刊　静　王信
楊氏家蔵方	淳熙一二刊　宮　王太
礼記正義	紹熙刊　足　王圭
尚書正義	紹熙刊　足　王圭　王信
欧公本末	南宋中期刊　静　王信
文選	南宋前期贛州刊同中期修　宮　王信
太平寰宇記	南宋中期　宮　王才
増修互註礼部韻略	同　呉明
晦庵先生全集	同　北平　呉明
資治通鑑綱目	嘉定一二温陵郡斎刊　宝　王友　陳智　潘亨　蔡中
周易本義	南宋中期刊　歴　王華
蘇文忠公文集	南宋前期眉山刊　中　宋彦
蘇文定公文集	南宋前～中期　北平　王祖　王道
太平御覧	慶元　蜀刊　静四　王庚　王祖　王道
六家文選	南宋中期蜀広都裴氏刊　故　王庚

国朝諸臣奏議　淳祐一〇刊　静　　王才
慈溪黄氏日抄分類　南宋後期刊　中　　王信　黄文
真文忠公続文章正宗　咸淳二刊　　朱通
咸淳臨安志　咸淳刊　静　　王真

原刻刻工八四人のうち、ここに二九人の名が含まれる。そのうち蜀刊本だけに見えるのが王庚、南宋後期刊本だけが朱通であるから、二七人までが嘉定一二年以前の杭州圏内の刊本の刻工と合致することになる。さらにその中で、南宋中期刊本だけに見えるのが陳智、淳熙年間は前期とみなすが、その淳熙以後に現れるのでさえ王信・呉明の二人であるから、これらを差引いても二四人がさらに限定されて南宋前期の刻工となる。避諱欠筆もこれに合う。

しかし、一人づつが合うということは、中国人には姓が少く、かつ特定されることでもあり、わたしはなるべく採らないことにしているが、ここにもその場合が少くないから、その例を無視したとしても、冒頭の両大蔵経と両唐書がそれぞれ三～五人づつ合うことで、杭州説は動かしがたいと考える。ただ、そこにも王姓が大半で、しかも名前が単字でありふれたものであるから、あちこちの王氏集団に同姓同名が珍しくないであろうし、比較的稀な田・任・余姓の刻工に合致するものがないこととともに、蜀刊説はとうてい成りたたないにしても、なお一抹の不安の拭いきれないことも否定できない。

次で南宋中期の補刻刻工であるが、二〇〇名弱に及び、中国版刻図録および中国訪書志中にしばしば、また両淮江東転運司刊三史、通典南宋本に関しても述べられているので、ここでは表を掲げるにとどめておく。

〔南宋中期〕補修刻工

2丁之才　丁松年　4方中　方至　方堅　毛端　王才
王生　王圭　王成　王汝林　王汝霖　王材　王阮
王定　王明　王信　王政　王春　王恭　王進
王渙　王遇　王椿　王誠　王寿　王敷　王璡
王諒　王禧　5包端　石昌　6朱光　朱玩　朱宥
朱春　朱祖　朱梓　7何昇　何澄　何沢　余政
余敏　呉中　呉志　呉宗　呉明　呉春　呉祐
呉清　呉椿　呂信　宋全　宋芑　宋昌　宋芾
宋通　宋琚　宋琳　李才　李允　李正　李仲
李成　李良　李忠　李昇　李昌　李茂　李政
李思正　李思忠　李倍　李師順　李時　李詢　李諒
李憲　阮祐　沈仁挙　沈文　沈定　沈忠　沈晏
沈昌　沈思忠　沈思恭　沈珍　沈珎　沈璋　8周明
邵亨　金祖　金滋　金嵩　金栄　金震　9彦中
施寔　施昌　施珍　洪坦　洪沢　10凌宗　夏乂
夏義　孫日新　孫春　孫琦　徐乂　徐大中　徐中
徐仁　徐杞　徐浚　徐珙　徐珣　徐高　徐琚
徐琪　徐義　徐経　徐栄　秦顕　馬松　馬祖
高文　高寅　高異　11張允　張升　張亨　張昇

張明　張堅　張富　張斌　張栄　曹冠英　曹鼎
章忠　章東　章茂　許忠　許茂　郭正　陳才
陳仁　陳用　陳仲　陳良　陳彦　陳晃　陳浩
陳彬　陳閏　陳寿　陳潤　陳錫　陳鎮　陸永
陸春　12童遇　項仁　黄戊　黄鎮　楊昌　楊春
楊寿　楊潤　董澄　詹世栄　賈祚　15劉仁　劉文
劉志　劉昭　蔡邠　蔣信　蔣容　蔣栄祖　鄭春
16銭宗　17繆恭　18魏奇　19龐汝升　龐知柔　20厳忠　厳智
21顧永　顧達　顧澄　22龔正

陳書のところで述べるが、元代の補刻は初・前・中期の三度にわたって行われたとみられる。しかし、初・前期はごくわずかのようで、刻工としては北陳承祖（沈承祖かは不明）ぐらいしか特定できない。大半は中期の大徳年間前後の刻工と考えられるが、これらを含めて次に表示する。

〔元〕補刻刻工

2丁銓　3大用　(尤)大有　士中　士元　子才　子成
弓華　4元亨　(徐)友山　(陳)天錫　太亨　(滕)太初　夫王
尤大有　文二　文栄　方中久　毛文　毛原敬　日新
王六　王元　王元亨　王付　王付四　王正　王玉
王全　王再十三　王圭　王汝良　王汝明　王汝林　王百九
王良　王明　王信　王垚　王桂　王高十三　王高
王細孫　王富四　王智　王寿　王寿三　王栄　王栄八
王徳明　王興　王興四　王興五　5丘之　丘挙之　付善可

北陳　占讓　古賢　可川　可用　可宗十四　可原
史伯恭　平山　石宝　6任昌　任亮　任阿　任阿伴
任韋　任欽　朱二　朱大存　朱子光　朱子寿　朱六
朱仁　朱元　朱文　朱丘　朱玉文　朱宗甫　朱長二
朱曾　朱曾九　朱陳秀　危寿　江厚　7何九万　何宗十七
何宗十四　何厘　何建　何原　何浩　何益　何通
何閏　何慶　何鎮　余彦文　君宝　呉千七　呉子華
呉士中　呉六　呉四崇　呉文昌　呉玉　呉宗　呉昌
呉津　呉祥　呉睡　呉栄二　呉栄三　宋全　李公正
李五　李玉　李庚　李耑　李茂　李祥　李澄
李宝　杜良臣　求裕　汪亮　汪恵　汪恵老　沈一
沈山　沈允　沈必達　沈承祖　沈珍　沈英　沈祖
沈韋　沈祥　沈翔　沈貴　沈椿　沈寿　沈瑋
沈謙　沈権　阮明五　8匋耑　周山　周秀　周受
周明　周慈応　周鼎　周応　孟三　宗二承祖　林伯福
林叔　林官保　林茂　林茂叔　林茂実　東山　青之
麦茂　芦開三　邵山　金二　金友　金文栄　金有
金宸保　金許一　金栄　金観保　(朱)長二　9兪升　兪吉
兪信　兪栄　兪声　姜公　(許)彦明　施国　施宝
洪来　洪福　胡文昌　胡券　胡昶　胡慶十四　茂五
茅化竜　茅文竜　范元　范良　范彦栄　范堅　范恵老
范華　10倪順昌　倪顒　孫日　孫白　孫再　孫再一
孫阮　孫斌　孫開　孫開一　徐友山　徐文　徐永
徐乂山　徐良　徐怡祖　徐明　徐泳　徐信　徐栄

徐栄祖　祖承　翁子和　翁升　翁栄　高文　高俊
高涼　高諒　高顕　11(陳)国才　婁正　崔茂　張一
張一秀　張二　張三　張成　張明　張阿狗　張珍
張斌　張広祖　張慶三　曹中　曹徳新　曹栄　曹興
盛九　章才　章文　章文一　章文郁　章亜明　章明一
章若　章演　章演孫　許成　許彦明　陳一　陳二
陳士通　陳万二　陳万三　陳仁　陳仁五　陳允升　陳天錫
陳文五　陳文玉　陳公友　陳日裕　陳邦卿　陳明　陳孫
陳晃　陳国才　陳復　陳璘　陳新　陳傳二十七
陳寧　陳栄　陳徳全　陳寿　陶中　陶春　12傅善可
単侶　雇恭　馮会　黄四崇　黄亨　黄鎮　13楊十三
楊仁　楊采　楊明　楊景仁　楚慶一　煥之　葉禾
葛弗　葛弗一　葛弗乙　葛辛　虞二　虞文挙　虞良
虞保山　虞寿　董大用　董辰　詹徳潤　14熊道瓊(徐)栄祖
趙旦　趙良　趙秀　趙明　趙春　趙遇春　斉明
斉明一　15劉子和　劉仁　劉仁中　劉埜　劉景舟　徳裕
欧志叔　潘用　潘佑　滕太初　滕弐　蔣仏老　蔡文達
蔡秀　蔡彦挙　蔡挙　蔣七　鄭埜　16銭昭　鄧広五
鄭子和　鄭名遠　鄭和子　繆伯山　繆珍　繆謙　薛志良　謝杞
応華　応徳　鍾同寿　18(丘)挙之　19羅生　羅恕　龐文竜　龐万五　21顧中信
22顕祖

・　・　両淮江東転運司刊三史第一次補刻第二次補刻

＊　南北史・唐書・隋書　元末明初補刻

南北史のところで、明の洪武二三年に福建布政司がまず金史・古史等を刊刻したが、それと共通する刻工による元大徳九路儒学のうちの広徳路刊の南史、信州路刊の北史の別版が存在することを述べた。七史にもさほどの数ではないがこれら刻工が補刻におり、魏書や南斉書に散見する。この版木には建刊本に特有の榕樹などの柔い木を用いたのか　成化公文紙を紙背とする魏書ではすでに刻工名のところが摩滅しており、嘉靖修補本ではまったくその名が見当らない。したがって、明前期印本の伝存する宋書・南斉書・魏書だけにその存否が確認できるのであるが、宋書には疑わしい葉があるものの、ほとんどこの期の補刻はないと思われる。他の四史にもあるいは行われているかと想像されるが、刻工名が見えない以上、後印本の版面からはまず識別できない。それで、本稿（上）の二一四～二一七頁に表示した南史・北史・金史など八書と同名のものは、江子名范双評　張名遠　の三名とごく少い。七史の元版、まして九路本以外の存在はいまのところ考えられないから、かれらは七史については明初のある一時期の補刻刻工であったとしか考えられない。

宋書には、稀に弘治四年と明記した補刻葉があり、下方に「監生王太」のように刻するから、国子監生が版下を書いたものであろう。それには左の氏名がある。

王太　王泰　王相　肖漢　李秘　蕭漢　姜滄　姚岳　陳沢

費徵　刘子宇　刘子璵

七史とも　嘉靖八・九・一〇年に、南監二十一史を整備するために大きな補修を受けたが、その際の刻工にほぼ次のようなものがいる。

嘉靖八年補刻刻工

何祥　呂奎　呂機　李受　李潮　易宣　袁電　高成　章悅
陳傑　陸先　黄林　黄珎　黄珣　黄珣　黄珪　黄琇　黄球
黄琯　黄琥　黄琰　黄琢　黄瑜　黄銑　黄瑢　黄碧　黄瑾
黄璸　黄雲　黄瑗　黄瓏　雇文挙

嘉靖九年補刻刻工

易堂　胡章　徐敖　張昆　黄旦　陸奎　盛応鵬　劉元

嘉靖一〇年補刻刻工

陳林　劉尾　容顕岩

嘉靖一二年補刻が稀にあるが、補修の不備の保全であろう。

以上、調査の結果を個別に提示する前に、綜合して解説したが、次にこれらのうち明前期までの印本について、一史ごとに検討して詳述する。すなわち、嘉靖八～一〇年に南監二十一史に組入れるために大がかりな補修を受ける前の、原刻葉をかなり多量に残す善本である。嘉靖修補本は世にいう三朝本であるが、これらは三朝本と呼ぶに至らない本であり　一部の明初修本もそれに準ずるといってよい。ただし、三朝本がほとんど全巻首尾完好であるのに、この方は南斉書および陳書の一本を除いて、すべて一部ないし大部を欠いた残本・零本であるのもやむをえない。

百衲本二十四史の七史の大半はこれらを底本としているが、それぞれ数本の集成であるだけに疑問を抱かせる点も多いので、それについてもその都度、言及する。

まず、便宜のためにこれら善本を一覧できるように掲げる。

宋　書　存六八巻（巻一～五・一一～一三・一五～七四）
　　至　元遞修　明礼部官書　四〇冊　中央図書館蔵
　　（一〇〇巻五四冊のうち　他は明嘉靖修）
同　　存五八巻（巻四～一二・一四～二四・二七・二八・三〇・三一・三九・四一～四八・五二～六五・七五～七九・八二・八三・九三～九六）　三一冊
　　至　元遞修　明晋荘王朱鍾鉉旧蔵　中央図書館（北平）蔵
南斉書　五九巻　至明初修　二〇冊　北京図書館蔵
　　明礼部官書　雙鑑楼旧蔵
同　　同　　一二冊　中央図書館蔵
梁　書　存四〇巻（巻一～六・一一～二一・二六～四一・四六～四八・五一～五四）　一四冊
　　至　元遞修　中央図書館（北平）蔵
陳　書　存二五巻（巻一（有欠）・五・六（存一葉）・八～一〇・一七（存尾一葉）～二二・二四～三六（巻一九後半欠））　七冊
　　至　元前期遞修　中央図書館（北平）蔵
同　　存　八巻（巻一七～二一・三一～三三（後半欠））　二冊

同　至 元中期遞修（明晋祠旧蔵）　中央図書館（北平）蔵
存　五巻（巻五・七・八・九・一〇（有欠））　一冊
至 元中期遞修　中央図書館（北平）蔵
同　三六巻　至 元中後期遞修　一六冊　静嘉堂文庫蔵
存四一巻　至 元中期遞修
魏書　紙背元延祐・泰定・元統・至元公文紙　北京図書館蔵
（一一四巻四〇冊のうち　他は明嘉靖修）
同　一一四巻（巻三～九補写）　至明初遞修　六四冊（補写九冊）
明礼部官書（雙鑑楼旧蔵）　アメリカ国会図書館蔵
同　存九四巻（欠巻四〇～五九）　至明初遞修　六〇冊
紙背明洪武公文紙（嘉業堂旧蔵）　中央図書館蔵
同　存四六巻（巻三八・三九・五九（後半）・六〇・六二～七〇・七二～九三・九五・九七・九九・一〇〇・一〇三～一〇九）
至明初遞修　紙背明成化公文紙　東洋文庫蔵
（一一四巻六四冊のうち　他は明嘉靖修・清補写）
同　存五七巻（巻五四～六五・六九・七〇・七二～一一四）
存　一巻（巻七一）　紙背明成化公文紙
至明初遞修　大倉文化財団蔵
（一一四巻八〇冊のうち　他は明嘉靖修・清補写）
同　存一七巻（巻一～一七）　至明初遞修　一二冊
紙背明成化公文紙　北京図書館蔵
北斉書　存一六巻（巻三五～五〇）　至 元前期遞修　五冊
中央図書館（北平）蔵
周書　存　三巻（巻四四（音尾一葉）・四五・四六（存首八葉））
至 元中期遞修　一冊　天理図書館蔵

冒頭に述べたように、この七史は嘉靖八～一〇年に大きく補修して南京国子監二十一史に加えられた。このため嘉靖修本はすなわち南監二十一史本であり、その伝本も少くない。しかし、もはや原刻葉の残存はまったくなく、南宋中期修葉もごく少い。蓬左文庫蔵の魏書に万暦一六年の補刻年記があるから（巻一〇九第一二葉）、この時期までに多少の補修は行われたこともあろうかと思われるが、他にはこのような年記がない。

至明嘉靖修本
宋書一〇〇巻　三〇冊　内閣（鄭）　三〇冊　内閣
二〇冊　静嘉堂　二〇冊　大倉　三二冊　書陵部
三〇冊　蓬左　三二冊　お茶水　三〇冊　中央
三二冊　中央　三〇冊　北京　二四冊　南京
上海（存巻七三・七四）
南斉書五九巻　一二冊　内閣　八冊　静嘉堂
一二冊　書陵部　九冊　蓬左（欠巻一～八・三五～三九・四五～五一）
一〇冊　中央　一二冊　中央　一二冊　北京大
八冊　北京（巻五補写）　上海
梁書五六巻　一〇冊　内閣　一二冊　静嘉堂
一二冊　書陵部　一〇冊　中央　一四冊　北京
一〇冊　南京　上海
陳書三六巻　六冊　内閣（鄭）　六冊　内閣

八冊　書陵部　六冊　蓬左　六冊　お茶水
六冊　中央　四冊　中央　二〇冊　中央
六冊　中央　八冊　北京　一二冊　北京
二冊　北京（存巻二七～三六）　六冊　北京大
上海

魏書一一四巻
四〇冊　内閣　二九冊　内閣鄭（欠巻一一三～一一四）
二二冊　蓬左（欠巻一～五九）　四二冊　静嘉堂　四〇冊　書陵部
三〇冊　中央（欠巻一三～一八・七一～七三・九三～九五・一〇七・一一一・一一二）　八〇冊　中央
四〇冊　中央　上海（存巻一三～四九・一〇五～一〇八）
六四冊　北京　上海（存巻四五～四六・六一～六五・八二～八三）
四〇冊　北京大　一〇冊　北京大（有補写）

北斉書五〇巻
八冊　静嘉堂　八冊　内閣鄭　八冊　内閣
一冊　大東急（存巻四五～五〇）　八冊　書陵部（巻一～八補写）　八冊　蓬左
一六冊　お茶水　二四冊　中央　八冊　中央
一五冊　北京　八冊　北京　八冊　北京大
八冊　南京　上海（存巻二七～三六）

周書五〇巻
一〇冊　静嘉堂　一〇冊　大東急鄭　一〇冊　内閣
一〇冊　蓬左　六冊　尊経閣　一二冊　故宮
一〇冊　中央　三冊　中央（存巻一～一〇）
一〇冊　北京　五冊　北京（存巻一～一五）
八冊　北京大　上海（存巻一～三五・四〇）

一〇冊　南京

内閣文庫本等の一部に鄭字を付けたのは明の嘉靖中に鄭履準の所蔵本で、嘉靖前半期の印行と思われ、おそらくこの中でもっとも早印本であろう。寛永寺勧学院の蔵印もある。内閣文庫のもう一部は昌平坂学問所旧蔵本で、ともにいまは離されているが、もとは二十一史を構成していたものである。書陵部・蓬左文庫本は、欠本もあるが、現在も二十一史の一部である。中央図書館本では、宋書から三〇・一二・一〇・六・四〇・八・一〇冊の七史が嘉業堂旧蔵で、同じ形の明印題簽をもち、嘉靖末ごろ印の二十一史のうちのものである。中国大陸所在本はいずれも未調査で、それぞれ北京図書館善本書目・北京大学図書館蔵李氏書目・江南図書館善本書目・上海図書館善本書目によった。上海目録は冊数を示していない。成簣堂文庫旧蔵・お茶の水図書館現蔵本も、未整理の由で実見していない。

宋書

一〇〇巻　五四冊　中央図書館蔵
巻一～五・一一～一三・一五～七四（計六八巻）
四〇冊　至〔元末修〕
他（計三二巻）　一四冊　至〔明嘉靖修〕

後補青緑色表紙（三三×二二・五センチ）、その表面の剝落が甚しい。二種の寄せ本のうち、ここにとりあげる元修本の方だけ裏打補修されている。

この四〇冊の毎冊首尾には大型の明の「礼部官書」印（一一・

七×五センチ）が捺され、清の徐乾学の「乾／学」「徐／健菴」印が第一冊首にある。礼部の印は明初修の入る南斉書と魏書にもあるが、所轄の官署としては新修新印本が収められるのであろうから、明代の修補が加えられている可能性も考えられる。ただし調査の際には気が付かず、百衲本を検すると、南北史等の明初別版にいる葉木虞良の刻葉がわずかに四葉ながらあるものの、この本および次掲本のものではない。明初の南監での補修に、かれら福州と関係のある刻工が起用されていることを示しはするが、現在この二本に明初修は確認できない。

残りの巻は至明嘉靖一二年修本で、両本の首に徐乾学より一年早い崇禎三年（一六三〇）生れ、順治四年（一六四七）進士の秀振宜の「季印／振宜」「滄／葦」「藝風／審定」印があるから、一七世紀なかば、両者の間を渡るころに取合わされたのであろう。そして「呉興劉氏嘉／業堂蔵書記」「劉印／承乾」（陰）「翰／怡」「劉承乾／字貞一／号翰怡」「呉興劉氏／嘉業堂蔵書印」印、「国立中央図／書館攷蔵」印が両本に捺されている。

存五八巻（巻四～一二・一四～二四・二七・二八・三〇・三一・三九・四一～四八・五二～六五・七五～七九・八二・八三・九三～九六）

至〔元末〕修　三一冊　中央図書館（北平）蔵

後補藍色表紙（三七・八×二三・四センチ）、題簽に「宋書本紀六巻之七」のように墨書、粘葉装。

毎冊首に「晋府／書画／之印」尾に「敬徳／堂図／書印」、首尾に「京師図書／館収蔵之印」を捺す。

すなわち、もと明の晋荘王鍾鉉の所蔵であったが、かれは弘治一五年（一五〇二）に没しているから（明史一一六晋恭王棡伝）、それ以前の印本であることは明らかである。しかし、本文に弘治四年修葉はもちろんなく、補刊年記もなくて、推定ながらおそらく元末までの補刻に止っているとみられる。葉木虞良の刻葉については、前本のところで述べた。なお、料紙に「卡□□解物人陳彦徳」、「衢州路西安県解紙人方允成」等の朱印が捺されているが、これと似た印は晋書の元刊本（一〇行二〇字本）や五代史記（旧京書影263）などにもみえ、明代初期のものと思われるから（宋元刊三国志および晋書について　三四七～八頁）、この本も明初印とするのが妥当であろう（なお、竺沙雅章氏　漢籍紙背文書の研究　京都大学文学部紀要一四　一九七三年　一三頁を参照）。

百衲本には、この晋王府の蔵印からみると、およそ三〇巻が影印されていると思われる。そのうちの巻八～一〇の三巻一冊、巻七五以下の残一一巻五冊は、他に善本がないからこの本の存在が貴重であるが、同様の巻一四（志四）はなぜか百衲本に用いられず、それには明の弘治や嘉靖の補刊年記がしばしばみられる。その明修葉は、この本では趙遇春、沈思忠、金震、方中以、王明、王渙、陳晃、朱梓、金栄、孫斌、徐乂、劉仁、施昌、王信、繆恭、沈文、張堅、王定らが刻工の南宋中期修葉が過半を占め、元修葉がこれに次ぐ。他の存巻は前掲の礼部旧蔵本とかなり重複していて、百衲本はおよそ五分に、ある巻はかれを影印し、ある巻はこれを用い、ときには一冊の首が晋府印で尾が礼部印であるというように混淆する場合さえある。それでいて補刻の調子に相違がないから、両本は同修、そしてほ

ぼ同印といえよう。

旧京書影に志巻一一第六五葉と伝巻六第一・一六葉の書影がある（二二九）～（二三一）。

しかし、百衲本は現存しない次掲本を第一に取上げている。すなわち、北平図書館善本書目には存三六巻の宋刻元印本がもう一本著録されており、その巻次は通巻にして二・三・六・七・一五～一八・二三～二八・三〇・三一・四一・五二～五七・六一・六二・六六～七二・八〇・八一・九七・九八である。このうち前二本に欠ける巻は八〇・八一・九七・九八の四巻であるが、これも含めて二〇巻以上はこの本をもって百衲本に影印しているようである。首尾に「京師図書／館収蔵之印」だけがみえるものである。この本も補修の状況は前二本に異るところはなく、ほぼ同期の修・印本であろうと思われる。

しかし、この三六巻本は行方が知れず、現存が覚束かない。

百衲本は、巻末の張元済の跋によれば、北京図書館所蔵の六七巻を基にし、嘉業堂劉氏の礼部旧蔵本を二三巻に用い、残る一〇巻を常熟瞿氏鉄琴銅剣楼と涵芬楼蔵の元明遞修本で補ったという。北京図書館本とは右の五八巻本と三六巻本の両本を合わせてのことらしく、また礼部官書印のみえる巻だけで三三を数えるから、張氏の挙げるようには数字は必ずしも単純でなく、各本に重複する巻は葉によって原本または写真の状態の良いものをそれぞれに用いたに違いない。巻一四は前述したように北平本が現存するにかかわらず、また八四～八六・八八・八九・九一・九二・九九・一〇〇の九巻は善本が伝存せず、いずれも明の嘉靖一〇年に至る遞修本を影印している。

南斉書

五九巻　　至〔明初〕修　　二〇冊　　北京図書館蔵

百衲本に影印の当時 江南傅氏雙鑑楼本は現在 北京図書館に収蔵され、その善本書目に「宋刻宋元明初遞修本　繆荃孫、楊守敬、章鈺跋　沈曾植題款　二十冊」とある。この三人の跋文は夙に 蔵園羣書校記 の南斉書の末にみえ（北平北海図書館月刊 一―五 一九二八年）、蔵園羣書題記巻一の 宋眉山本南斉書跋 に再録されている。

宋書の一と同じように、各冊首尾に「礼部官書」印を捺すが、その他の印はない。

百衲本にみるかぎりすでに原刻葉はまったく残存せず、南宋中期の修葉が多くて、その際の 敦 字の欠画もある（巻一―一九葉 刻工 呉明）。元代には少くとも二度の補修が行われたが、それが元末に止まらず、明初に及んでいることは、明初版の南北史等の刻工と同名の者が一〇名ほどもいるから明らかである。すなわち、毛原敬　朱宗甫　江子名　李五　周受　張名遠　陳士通　黄子崇　葉禾　羅恕 の刻葉が二〇数葉はあり、それに 付善加　朱王文　陳徳全　虞寿　劉子和　劉景舟　鄭子和　鄭和子　羅恕 ら同類と見られる者の葉も二〇葉ほどある。

五九巻　　至〔明初〕修　　一二冊　　中央図書館蔵

後補茶褐色表紙（二八・六×二〇・二センチ）。宋の曾鞏らの校定上書叙録、南斉書目録（首二葉欠）と続き、本文首葉（南宋中期修・刻工王才）、冒頭の巻一の小題・大題の過半がすでに摩滅している。これは次の嘉靖修本を見ると、その補刻の年記は入っていないが、版面の上半と首題のところが明らかに補修されている。そのほかとくに版面の四周の破損や漫漶の甚しいものがかなりあり、前掲本と同版同修ながら、おそらく相当に後印で、嘉靖の修補を受ける直前の印本かと思われる。嘉靖修本と同じく、治平二年の崇文院の牒がない。

一部に朱句点が施され、第九冊首に「漢陽／椎官」（陰）、一冊首に「読易／世家」の両印がある。

零葉　旧京書影所載本

旧京書影に、「宋刻零葉、……旧清内閣書、見蔵大連図書館。」として、（二二二）志十五之四（提要の志十二は誤り）、（二二三）伝十之十五の二葉の書影が掲載されている。これはともに南宋中期の修葉で、刻工は曹鼎と陳寿である。元明修とは記されないものの、原刻本でないことは確かであり、補修がいつまで降るかわからない。両葉ともその巻の中途であり、零葉というのがどの程度の残か想像がつかないが、それが少いほど補修の時期はきめにくい。すなわち、前掲本より善本であるとは必ずしも言えないのである。

北平図書館善本書目に、宋刻明印本とある五十九巻は、いま所在不明である。旧京書影（二二四）の伝三十六之一の書影がこの本かと思われるが、匡郭右上隅の痛みが百衲本より進んでおり、提要に明修本という。

梁書

梁書の明嘉靖修がまだ入らない善本はわずかに残一本で、旧北平図書館蔵、いま台湾にある。むろん百衲本の底本とされているが、この本の欠巻には嘉靖の補刻葉が散見されるのもやむをえない。この調査にはきわめて不快な思い出がある。

存四〇巻（巻一～六・一一～二一・二六～四一・四六～四八・五一～五四）　一四冊

至〔元〕遞修　中央図書館（北平）蔵

後補渋引焦茶色表紙（三一・三×二四・一センチ）、縹色地の題簽に「梁書本紀巻之一」のように墨書、粘葉装。南宋中期修葉は燉廓字も欠筆する。補修は元代までで、明初のものは確認できない。一部に欠葉と大きく破損した葉があり、百衲本では右の存巻にも嘉靖修葉を用いた場合がある。「京師図書／館収蔵」印。旧京書影に巻二の首尾二葉を掲げる。

陳書

七史のなかで巻数が少いためか陳書がもっとも善く、北平図書館旧蔵の三部はいずれも残本であるが、元の初期と前期までの遞修本で、静嘉堂本が完本であり、かつ元中期修本であるのに、なんとなく劣るような感さえ抱かせるのである。したがって原刻葉の残存が多く、しかも四本を対照することによって、

元代の補刻が三度にわたったことが確認されたことが貴重である。

これは他の六史にも、さらには南宋の臨安の国子監から元の西湖書院に伝えられた諸書の多くにも、おそらく同様に行われたかと推測される。しかし、初・前期の補修はごくわずかで、さらに後修・後印の本ではほとんど識別できない。中期、すなわち大徳ころのはかなり大がかりで、他の諸書にもしばしば見受ける。

存二五巻（存巻一（存第一五表・一八裏～二〇表・二一～二六葉）・五（欠第一五葉）・六（存第四葉）・八・九（欠第一六葉）・一〇（欠第一・九葉）・一七（存尾一葉）・一八・一九（欠第七葉以下）・二〇～二二・二四（存第九・一〇葉）・二五（存第二葉）・二六（欠第一・二葉）・二七（欠第一〇～一六葉）・二八（欠第一七葉）・二九～三六）　七冊

至〔元前期〕遞修　中央図書館（北平）蔵

改装後補濃紺色表紙（三五・四×二三・七センチ）、粘葉装、裏打補修。詳記したように欠葉が多く、存二五巻といっても一葉しかない巻が三に及び、残葉を集めて構成したことが窺われる。しかし、後に述べるように、元初にくだるかと思われる修葉をごくわずかに含むものの、宋の原刻葉の残存はもっとも多い。

とりわけ、巻二九と三二はともに全一一葉が原刻であり、残葉があまりに少いが、巻七（存一葉）と巻二五（存二葉）も原刻である。また、南宋中期にかなりの量の修補が行われており、巻一、五、六、一九、二二、二四（存二葉）、三一、三四、三五、三六の一〇巻がそれまでの修本である。ほかに北陳という刻工の修がそれに加わっているのが、巻二八と三三であるが、かれは末期であるにしても宋人、降っても元初の人でないかと思われる。さらに他の各巻は、わずかながら黄謝徐承祖などの刻工名の元初と判定したい修葉を含む。

以上によって、存二五巻七冊を総合すればこれは元初までの遞修本であり、後掲の静嘉堂本は元の中期にさらに補刻を重ねているから、それ以前の印本ということになる。しかし、すべて原刻葉の巻と、補修が南宋中期、（同末期）元前期までのものと変化があり、しかも巻三一・三二のこの本の原刻葉が、やはり至元中期修の次掲本では中期修葉に代っているから、少くともこの両巻と至元初修の巻とは、本来、別本であったはずである。欠巻ばかりでなく、欠葉があまりに多いことや、「京師図書／館収蔵之印」の印章が第五冊以降（巻二八～）にしか捺されていないことも考えると、この本は宋刊宋印本を含む幾種かの端本を寄せて現在の一本に成ったことも思わせる。

百衲本はむろんこの本を底本の一部としているが、欠葉が多いためか、せっかくこの本に原刻葉が残っているのに、他の後修本を用いて元修葉を掲げる場合がある。巻五第一三・一四、巻八第一・二、巻九第一・二・五・六、巻一〇第五、巻一七第九、巻二二第一・三・四、巻三一第二、巻三二第五・六葉である。

存八巻（存巻一七～二一・三一（欠首半葉）～三三（欠第一三～二二葉））　二冊

至〔元中期〕遞修　中央図書館（北平）蔵

後補濃紺色表紙（三二・六×二一・九㌢）、粘葉装。「晋府／書画／之印」、「橋氏／家蔵」、「国立北／平図書／館攷蔵」印。

第二冊の巻三一第一・二葉、三二第五・六葉は、静嘉堂本とも刻工 林 の元初修葉であるが、前掲の存二五巻本では原刻葉であった。つまり、同本のこれらの巻はおそらく宋末の印本であるが、元に入って補刻されたのがこの本であろう。

中期の補刻は字様は悪くなく、数も少いものの、時に墨釘の箇所がめだち、校正の忽卒、粗雑を物語る。静嘉堂本に較べると、わずか存七巻で原刻葉がなお四五葉も多く、南宋中期修葉にも同じことがみられるから、本格的な補修はこのあと静嘉堂本との間、おそらく中期の大徳以後に西湖書院で行われたと思われる。いいかえれば、これはその前の印本である。

百衲本はこの本も用いていて、その巻一七首に晋府と橋氏の両印がみえ、前掲本に原刻葉があるのにこの元初修葉を採る場合もある。しかし、葉によって北平の各本と静嘉堂本を適宜に用いているようで、巻首尾の印でその巻・冊の底本を判断するわけにゆかない。

存五巻（巻五（欠第一・二・二七～三一葉）・七（欠第一・六～八葉）・八・九・一〇（欠第八・九葉））　一冊

至〔元中期〕遞修　　中央図書館（北平）蔵

改装後補濃紺色表紙（三二・四×二一・三㌢）、包背装。

巻五は存二五巻本と同じく、原刻二葉と南宋中期修葉で、宋印本の可能性もある。巻七は同本に欠巻であるが、静嘉堂本にない原刻葉が三あり、元初の修葉を含む。巻八～一〇では原刻が七冊本より七葉も減り、そこに静嘉堂本と同じ元中期の補刻が行われていて、百衲本も原刻を採らずにこの修葉を影印している。すなわちこの一冊は、宋末から元にかけての二ないし三期の修・印の異る残五巻が後に合綴されたものであろう。

ただし、この本は巻九末葉が原刻であるのが（刻工田立、百衲本は田力とし、存二五巻本は刻工名がない）、静嘉堂本では元修（王興）に代えられている。

三六巻　　至〔元中後期〕遞修　　三六冊　　静嘉堂文庫

後補香色表紙（三二・八×二一・五㌢）、襯装。

至 元修本の唯一の完本であるが、右の三本より元代にさらに一回は補刻を重ねて、原刻葉がかなり減り、印行はおそらく明代に降るかと思われる。百衲本では陳書全四四九葉のうちには、原刻葉がその四分の一を越える一四二葉も認められるが、この本では二一葉が存するにすぎず、多くが元の中後期に補刻されたらしい。そしてさらに前掲本の一部にみられたように、おそらくはさほど時を隔てずに、もう一度補修が行われたらしく、また原刻葉が減り、南宋中期修葉もかなり新しい版木に改められた。しかし、右の三本が欠巻のところには、静嘉本だけに二葉の原刻が残っている。

さて、このような元代の二ないし三期の補修の問題であるが、いままで元の初期と中期のそれを識別することがなかなか難しかったものが、ここに北平の三本と静嘉堂本との同じ巻の間にはっきり差違があることによって明らかになった。静嘉堂本の後修葉の刻工は左に列挙する通りで、かれらが大徳ころの

人たちであるから、補修は元中後期と考えられる。それより先でかつ南宋中期以後の補刻は、字様などから推して元の前期および中・後期とみるのが妥当ではないか、ということである。

百衲本は、基本的には全三六巻を具備する静嘉堂本を底本としたらしく、北平三本のいずれかの巻が存する場合も含めて、巻首・尾にこの本の汪士鍾らの蔵印がしばしばみえる。そして、より善本の三本に原刻などのより善い葉があったときに、それと差しかえたようである。

さて、静嘉堂本にはじめて現れる元の刻工は左の通りである。北平三本と対比して後修の明らかな者をまず掲げ、三本が欠巻で静嘉堂本だけにみえる者で右に準じて同期とみなされるのをつぎに（　）に入れて続けた。

2 丁鉉　4 毛文　王付　王圭　王桂　王細孫　王興
（王全　王信）　6 任阿　任亮　任韋　务陳秀（朱曾）*
7 何九万　何益*　何慶*　吳子華*　吳宗　吳祥　李耑
李宝　（沈珍）。　阮明五*　8 周鼎*　（芦開三*　金友）　9 胡昶*
（胡慶十四）*　茅化竜*　邵夫　10 孫日*　（孫開一　孫斌）
徐文*　徐友山*　徐栄　徐栄祖*　（徐泳*　翁子和）　高涼
11（張三）*　章文一*　章亜明*　陳二　陳邦卿*　陳復　陳万二
（陳文玉）*　陶春　12（単侶）*　13 楊十三*　楊明*　（楊采）。　葛辛*
詹徳潤　15 劉仁　滕慶*　（蔣蚕）*

このなかで右肩に＊印を付けたのは、元大徳四年（一三〇〇）序刊の大徳重校聖済総録二〇〇巻、およびそれと三〇人ほども刻工が共通する南宋前期両淮江東転運司刊三史の元修刻工と同名の者である（南宋両淮江東転運司刊三史について史学四六～三一九七四年）。すなわち、この四本では静嘉堂本にはじめて見える元の第三次修は大徳ごろに行われたわけである。そして、明初の補刻葉は絶無であるから、この本の印行は元の後半、おそらくはその末期にされたのであり、北平三本は大徳以前の印本であることが明らかになった。

魏書

魏書の善本ではやはり百衲本所収本が最右翼であるが、これには涵芬楼・北京図書館・江安傅氏雙鑑楼・呉興劉氏嘉業堂蔵本を用いて影印したとされる。残念ながらこれらはほとんど未見であって、東洋文庫・大倉集古館の明成化以後の印本を中心に見てゆくが、そのたの便宜もあってあらかじめ百衲本を検討しておく。当時の所蔵の各目録によれば、百衲本の底本として左の各本が考えられる。

北平図書館善本書目

1　存七二巻（目録・紀一～一二・伝一～二八・三一・三二・四二～五八・六六～七七・志五）　宋刻元印本
2　存二六巻（伝一〇～一四・二四～三五・六一～六三・八〇～八二・志八～一〇）　宋刻明初印本
3　存　九巻（伝七中～七下・志六・九～一〇・一三～一四・一七～一八）　宋刻明印本
4　一一四巻　宋刻明印本

雙鑑楼蔵書続記

5　一一四巻（鈔配巻三～一九）　宋刊元修　六四冊（鈔配九冊）
（礼部官書朱文大印　季振宜印・滄葦・少谿主人　朱文諸印）

嘉業堂善本書影　（書影　上書叙録・巻一　各首葉　ともに元修葉）

6　一一四巻　宋刊（元修）本

7　一一四巻　宋刊元明遞修本　四〇冊

中有四一巻、用元代公牘紙印、紙背多有延祐・泰定・元統・至元等年号、其余各巻、補至嘉靖八年。

8　存一七巻（巻一～一七）　宋刊元遞修本　一二冊

用明南京都督府諸衛各倉及馬草場公牘紙印、紙背有成化年号。

北平目録の刊印の時期の推定はかなり信用できると考えられるから、1 は元修元印本と、2 にはあるいは明初の補修が入っていることを認めたかと推定される。3・4 の明印とはおそらく嘉靖の修を指し、そうでなくとも 1・2 より、相対的に後修後印であろうから、百衲本には 1 の存七二巻を用いたであろう。京師図書館印が巻一・二・三・五・八・一二・一五・一九上中下・六一・八二・一〇六上の首または尾にみえるが、1 はこれらの巻をすべて含み、一方 2 にはこれが欠巻であるからである。しかし、一九五九年の北京図書館善本書目にこのうちの前三本はみえず、台湾にも運ばれていない。

5 の雙鑑楼本はワシントンの国会図書館に入って、美国国会図書館蔵中国善本書目（王重民輯録袁同礼重校）巻二に宋刻明初印本として著録され、およそ次のようにいう。

……検其刻工姓氏、有与明初翻刻南北史及遼史同者、則当是明初刷印本、（注略）張菊生傅沅叔先生謂為元印者、恐不足信。巻内有「礼部官印」、「季印振宜」、「滄韋」、「小谿主人」、「雙鑑楼」、「蔵園」、「溥増湘」、「沅叔審定宋本」等印記、其礼部官印為明初所鈐、疑為南監修版之後、礼部遣人専印、故用紙独佳也。自巻三至巻十九、凡十七巻九冊為鈔配、然鈔配本上鈐季氏印、則為明末清初所写、亦三百年前物也。

魏書の補刻刻工の一部が、元大徳九路儒学刊南北史を明初に覆刻した本などにも見えるということで、前稿でそれが洪武の末ごろとわかったから（本稿（上）斯道文庫論集一九輯　二〇三頁）、これには明らかに明初の修補がある。礼部官書印は宋書と南斉書の各一本にもあったが、これは国子監が新たに版木を整備して印刷したものを礼部に収めたのであろうから、おそらく七史がみなあったはずであり、当然、明印本であろう。整備するからには多少とも補修を行ったことが十分に想定されるが、それが事実であったわけである。宋書にはごくわずかながら多分、南斉書には明らかに三〇葉以上の明初修葉が認められる。なお、この明初の補刻については、大倉集古館と東洋文庫本のところでやや具体的に述べる。

6 の嘉業堂本は、嘉業堂善本書影に巻二史部と巻三史部の南雍三朝本との双方に巻一首葉が掲げられているが、上象鼻に字数、下象鼻に 曹中 の刻工名が見えて、明らかに元修葉である。百衲本の同葉は北平本の同版同修葉を用いているが、嘉業堂書影に巻頭を提示するのが穏当であるとはいえ、なぜ原刻葉を取上げないかには理解に苦しむ以上のものがある。

いま、台湾の中央図書館に存九四巻六〇冊、その宋本図録に嘉業堂旧蔵の「此帙以明洪武時公牘綫印、約修補迄明初」という善本があり、欠二〇巻・増四〇冊と変っているが、百衲本ではその欠けた部分（巻四〇～五九）には嘉業堂の蔵印がないか

ら、これがそれに当るらしい。洪武の紙背文書のある本としては、竺沙雅章氏の一覧表によれば（漢籍紙背文書の研究　京都大学文学部紀要一四　一九七三年　五頁）、北京図書館に爾雅疏一〇巻（宋刊宋元明初遞修本）、忠文王紀事実録四巻（宋咸淳七年呉安朝等刊本）、中央図書館にこの魏書のほかに隋書八五巻（元大徳饒州路刊本）、そして静嘉堂に漢書残八巻（南宋前期両淮江東転運司刊宋元遞修本）がある。このうち漢書は洪武年間（三一年）前半の浙江方面の戸籍簿などであるが、この魏書と隋書もおそらくこれに類するもののようであって、このような廃棄文書を利用しての一連の正史の印行の一部なのであろう。このなかで紙背文書も刻工も実査できたのは静嘉堂文庫の漢書だけであって、それも残八巻は巻九四上下・九五・九六上下・九七上・九九上中で、厳密には五巻弱にすぎないが、ひとまずこれに見ると次のようである。袋綴の内側の文書の年代は十分に確認できないが、洪武初から一三年まではあって、ほぼ同一〇年代前半のものと思われ、したがってその廃棄は洪武末か以後かになろう。そうすれば、雙鑑楼本の例によって明初修が当然予想されるが、三五名ほどもいる元修（以後）刻工のうちに、南史・北史・遼史・金史・古史・古今紀要・慈溪黄氏日抄分類・文粋、そして後述の魏書と文献通考の補刻などの明初刻工と同名の者はいない。これらにとは別名の明初刻工がいないとは限らず、この巻数ではとても断定できないが、ひとまずこの漢書に明初修があるとはいえないのである。紙背文書の年代と雙鑑楼本からはこの嘉業堂本の魏書も明初修本と想像されるが、前掲のように図録と訪書志の両解題の見解も分れたように非常に微妙な問題であって、原本について再調査の必要がある。

涵芬楼本は両本とも北京図書館に現蔵のようである。7は北京目録にも「宋刻宋元遞修公文紙印本〔配宋元明遞修本〕」とあるばかりで、至元遞修の元の公文紙印本の四一巻の巻次を燼余書録ともども示さない。が、その最後の年号の至元から三〇年ほどで元が滅亡したから、やはり文書廃棄の年数を見込めば、元末の明が南京に実効を及ぼして以後の印本ではあろう。補配本はおそらく嘉靖修で問題にならないが、四一巻の元修本は雙鑑楼、嘉業堂本より優れ、手近にもあって、百衲本がまずこれを基本としたらしいことは当然である。

ところで、王国維撰の蔣氏密均楼の伝書堂善本書志（一九二二年序）に魏書が三本、著録される。

一三〇巻（巻一六～二一・三六～四八・五四～五八・六二～七〇・九三・九四・一一一～一一四・一一六～一三〇　他伝巻一七・一八・四七・四八・五四・五五）　計三九巻　元至元延祐至正公文紙印本　明嘉靖補刻本

存六巻（明洪武公牘紙印本　鸞台学士四箴堂記二印）

存一七巻（巻一～一七　明成化公牘紙印本）

このうち存一七巻が次掲の8本と同じであるから、存巻数に二巻の誤差があるが、この元公文紙印本も涵芬楼の所蔵となったのかも知れない。ただし巻数に不審なところ他にもあり、まず魏書の総巻数は一一四巻であること、したがって巻一一六～一三〇というのはありえないこと、そして元公文紙本の計三九巻とはこれを除いた数であって、これを含めると五四巻にな

ることである。魏書には一巻が上（中）下、一～四と分たれた巻があるから、漢書にも似た場合があるが、これらを各一巻に数えるとちょうど一三〇巻になるものの、この宋刊本ではそのような数えかた、巻次の標示はいっさいしていない。仮りに一三〇巻がそのような結果であるとすると、巻四（上下）から始るから、存巻の巻次も大きくずれて、通行の一一四巻の巻次にすると　巻一四～一九上・三一～四三・四九～五三・五七～六五・八七・八八・一〇五（一～四）・一〇六中～一一四となり、これを通算すると四六巻（うち二巻は不全）となって、王国維とも涵芬楼燼余書録とも数が合わない。いずれにせよこれを涵芬楼本と仮定して、三九巻と四六巻の双方の巻次について百衲本を見ると、前者では北平図書館の印が五、嘉業堂印が三、雙鑑楼本の印が一九巻にあり、後者ではそれぞれ三、九、一五巻にある。すなわちもっとも善本の元公文紙印本をあまり用いなかったことになり、やはりこれは涵芬楼本とは異るのかも知れない。

8 の明成化公牘紙印本は、北京目録では「宋刻宋元明遞修公文紙印本」とされるが、大倉集古館と東洋文庫にも同じ成化の公文書の紙背本があり、洪武末前後に補刻が行われたであろうから、至 明遞修というのは正しいと思われる。至元と成化では百数十年の差があり、洪武からも百年に近い差があるから、この本が百衲本に用いられることはあるまい。

結局、1 7 が至 元遞修本、5 が至 明初遞修本、2 6 がそれと同じかやや早い本で、百衲本の底本とされた可能性の濃いのは、この五本、とくに 2 を除く四本にしぼられる。いずれも元末から明の洪武後、すなわち一四世紀後半の半世紀ごろの印本である。

ところで百衲本巻末の張跋には、「涵芬楼所蔵僅得其半、先後仮北京図書館暨江安雙鑑楼傅氏・呉興嘉業堂劉氏蔵本、補完。巻中有元代修補之葉、或謂有明初続補者、然皆不著年号、殊難断言」という。まず存四一巻の涵芬楼本を基本とし、この欠巻を他の三本で補ったわけである。

そこで、これを百衲本の各巻首尾の蔵印について見ると、涵芬楼の印章はなく、北平本の「京師図書／館収蔵之印」が目録第二葉ほか一四巻に、雙鑑楼本の「礼部官書」または「季印／振宜」「滄／葦」印が目録ほか四六巻に、嘉業堂本の「呉興劉氏嘉／業堂蔵書記」印が一八巻に認められる。北平本の印記の所在はほとんど巻一九までであるが、第一にこれはすべて 1 の存巻で 2 には欠巻のところであるから、後者は百衲本に含まれていないと見てよい。次にここはちょうど雙鑑楼本の鈔配部分であり、それ以後については雙鑑楼本が圧倒的に多く、一部に嘉業堂本を配し、北平本は巻六一・八二・一〇六上の三箇所にしかすぎない。

しかし美国国会図書館蔵中国善本書録に指摘されたように、雙鑑楼本には、あるいは嘉業堂本にも明初の補刻が行われていて、至 元修の 2 の北平本、6 の涵芬楼本より劣ることに、張氏が気付かなかったからである。元の両本では多分 欠巻があろうし、欠葉も当然のことであるから、これを他の二本で補

うことは大いにありうるし、たまたま明初修葉を用いざるをえない場合もないとはいえない。しかし、元修と明初修の区別が非常につけにくいものであるから、なんらかの便宜で雙鑑楼本を多用し、その結果、百衲本にはかなりの明初修葉が影印されている。この明初修葉については、次節に大倉集古館・東洋文庫本をもって述べる。

いずれにせよ、現在と違って当時は写真原版を作ることが不自由であったのに、したがって、上杉家の史記黄善夫本の撮影の実状を耳にするにつれ、この四本をすべて写したとは思いもよらない。むしろその事情が、涵芬楼本は別として、ほぼ完本の雙鑑楼本を優先させ、その巻頭に近い補写の一七巻がちょうど北平本にあるから、これを組合せることとしてその部分だけを撮影し、その不良箇所に他を配したかと憶測する。それはともかくとして、元修の北平本七二巻と涵芬楼本四一巻でかなりの巻が揃うであろうから、これを底本として確立し、なお欠巻に嘉業堂、雙鑑楼本を補えば、百衲本として望ましいものになったはずである。百衲本には、明初修葉が刻工名で確かなものだけで少くとも一三〇葉はあり、確認はできないもののこれらと同修と見えるものを含めると二〇〇を越える。右のように至元修本を主体とすれば、これらは半減し、その分、原刻または南宋中期修葉が増えたはずである。とくに存七二巻の北平本がいま所在不明であるだけに、底本の選択利用にもうひとつ定見を欠いたことが惜しまれる。

以上の百衲本関係の諸本に次いでは、大倉集古館（大倉文化財団）と東洋文庫の各一一四巻のうちの一部に、元修までの善本がある。すでに触れた元後期修葉についても、この二本を一葉ごとに百衲本と対比して判明したものであるから、これらについてやや詳しく述べる。

まず、大倉本であるが、これは同版別印の四種を取合せて全一一四巻としている。

一一四巻　八〇冊　大倉文化財団（集古館）蔵

A　巻五四～六五・六九・七〇・七二～一一四（計五七巻）
　　至〔明初〕遞修〔明前期〕印

B　巻七一　同　〔明成化弘治間〕印
　　（紙背　成化一〇年前後公文紙）

C　目録・巻一～四八・六七・六八（計五〇巻）
　　至明嘉靖一〇年遞修

D　巻四九～五三・六六（計六巻）　〔清〕補写
　　改装後補香色表紙（二九・九×二二・一センチ）、金譲玉装（料紙高さ二六・五センチ）。董康芬誦室旧蔵本であるが、大倉文化財団で改装したという。

A本は百衲本とほぼ同じように、原刻葉が多少とそれに南宋中期・元初期・同中期の修葉とで成るが、百衲本とやや異るのは、巻七七～七九・一〇六上中下・一〇八之四などで、原刻葉、稀に南宋中期修葉がこの本では明初の修に代っていることと、各巻に一ないし四葉ほどの欠葉が必ずといってよいほど現れることである。

前者は百衲本とこの本とを直接に対比して出たもので、百衲本の原刻または南宋中期修葉に取って代った葉の数は少いが、その刻工名は左の通りで、南北史等の九路本とその覆刻本の双方に見られる明初のものである。

毛原敬　朱宗甫　江子名　江厚　　呉六　　呉睡　　呉栄三
李五　　周受　　周応　　范彦栄　張名遠　張広祖　郭□中
陳士通　黄四崇　鮑与道　薛志良　羅恕

これら明初補刻刻工の存在は、雙鑑楼本についての美国国会図書館の善本目録の記事を裏付けるとともに、逆に百衲本の底本のうちに、おそらく涵芬楼本であり、北平本はあるいはと思われるが、至元修本があったことを証するものである。そして、前述のように、雙鑑楼印の多かったことに不審を抱くのである。

これらから、百衲本に見るかぎりで確証はないが、版式から察して次の刻工も明初の疑いが強く、元の刻工と区別しておいた方がよい。

付善可　危寿　　朱王文　余彦文　施宝　　陳徳全　盧保山
盧寿　　劉子和　欧志満　蔡彦挙　鄭子和　鄭和子

この中で欧志満の刻葉に京師図書館印が見えるから（巻一九中第一葉）、1の北平本も明初修本の可能性が濃い。ついでに、前表の黄四崇の刻葉に季振宜の印があり（巻七三第一葉）、雙鑑楼本がそうであることは明らかである。

なお、これら明初刻工は、静嘉堂等に所蔵の元の泰定元年（一三二四）西湖書院刊・後至元五年（一三三九）修の文献通考三四八巻にも見え、よく注意しないと原刻刻工とも、まして後至元の補刻刻工とも多分に見分けにくいから、つい元後期の刻工と誤認しがちである。文献通考にもそれより半世紀以上は後の明初修が行われている、ということなのである。

ついで、各巻に補写葉がめだつことであるが、その多くはやや後印の次掲のB本、とくに東洋文庫の明成化公文紙印本に補写に形は変ってもそのまま引継がれる。これについてはそこで述べるが、この双方に同じ葉が欠けることは、その版木の破損が甚しくて使用に堪えられないか、失われてしまっていたと思われる。東洋文庫本の欠葉はもう少し増え、このA本になお存する葉でなくなっているものもあり、漫漶も進んでいるから、二本の間には印行の時期に差があるが、B本を成化末弘治初の印として、その差を二、三〇年もみても成化の直前か成化初であり、A本も明代に入って南京国子監で付印されたことは確かである。

Bの巻七一、この一巻一冊だけは、原刻葉一六を含み、Aと同じく明初期までの逓修本であるが、料紙は成化八～一〇年ごろの南京都督府諸衛倉関係の文書の紙背を利用しており、いまやや降って成化末弘治初に印行されたとしたばかりであるが、これは東洋文庫本の四七巻と同じであるからそこで述べる。ただ、東洋文庫本が、巻五九以下巻一〇九までには欠巻がごく少く、特に巻六二～九三のなかで唯一の欠巻にこれが相当して、あるいは僚巻ではなかったかの感を抱かせる。なお、同様の8の涵芬楼旧蔵・北京図書館現蔵本は存巻一～一七で、やはりこ

れらと重複しない。

C D はここでは問題としない。

東洋文庫本は三種の同版別本を寄せている。ここでは、修・印の時期を大倉本に合わせて B 以下の記号を冠した。補写はともに D としたが、その時期に関連はない。

一一四巻　六四冊　東洋文庫蔵

B　巻三八・三九・五九第一九葉以下・六〇・六二～七〇・七二～九三・九五・九七・七九・一〇〇・一〇三～一〇九（計四七巻）至〔明初〕遞修〔明成化弘治間〕印（紙背　成化一〇年前後公文紙）

C　一～三・九～三七・四〇～五三・五六～五九前半・七一・九四・九六・九八・一〇一・一〇二・一一〇～一一四（計六一巻）至明嘉靖一〇年遞修

D　巻四～八・五四・五五・六一（計八巻）〔清〕写

「藤田鍼峯／蔵書之記」印があって、藤田豊八博士の旧蔵本である。香色表紙（三〇・七×二二・二センチ）、金譲玉装（料紙高さ二六・八センチ）、一部裏打補修。

B本はほぼこの後半であって、全巻の半分にも満たない。が、四七巻弱の紙背は、大倉集古館本の巻七一、旧涵芬楼・現北京図書館蔵本の巻一～一七と同じく、明の成化年間の公文書である。かつて竺沙雅章氏は東洋文庫に滞在して詳しく調査されたが、氏によれば（前掲書の研究 漢籍紙背文七頁）、成化七～一〇年の南直隷・湖広・浙江等所属の諸県の里長・糧長らが、南京都督府の諸衛倉・馬草場に糧米等を送納した運糧呈文、諸衛倉のその受領報告の収糧揭帖、そしてそのほか諸衛官攢軍斗名簿など衛倉管理に関する諸種の揭帖類が含まれるという。

ともかく、成化の末年の二三年までにこれら文書の年代から約一五年あるから、廃棄・再利用の年数を見込んで、明成化弘治間印としたものである。大倉A本がこれより早印であることは触れたが、この本と対比すれば明確になる。

まず百衲本との対比においては、大倉A本の場合とほとんど差がなく、すなわち明初修が増加している。ただ巻六五第五葉は、百衲本が刻工薛志良の明修葉であるのに、逆に後印のこの本は 田立 と見える原刻葉であり、さらに大倉A本が確かに薛志良 の明初修葉である。一度、明初に補修してさしかえたものを、再び古い原刻版木に戻したとしか考えられないが、解せないところである。なお、その次葉は三本とも薛志良の刻葉である。

大倉A本と較べると、補写葉がある箇所ではかなり集中的に増えており、また明初修葉の刻工名がこの本では摩滅した場合が少からずあり、この本が明らかに後印本である。最新の明初修に早くも漫漶が現れていることは、南北史のところで述べたようにこの刻工が当初は福建で従業したものであり、この方面の柔い材質の版木であったとすると、この補刻は南京国子監が行ったはずであるが、福建に発注した場合も想像できる。

そして補写であるが、大倉A本の南宋中期または元修葉に代るものであり、その多くがやはり成化公文紙の紙背にされてい

る。しかも、その大半が嘉靖修本（南監二十一史本）では同八年の補刊年記を持っているから、この本の印行の成化弘治間のころには版木の破損が進んでいたこと、そのために嘉靖修の最初に補刻されたことを示している。

魏書にはないが、宋書に弘治四年の補刻年記がわずかに見られる。このころ一部を修補して七史またはそのいくつかが印行されたのであろうが、成化公文紙印本もそのときのものではないかとは、十分に考えられる。

北斉書

北斉書の善本は旧北平図書館蔵の残本一部があるにすぎないが、原刻の残葉が多く、元初期の修がごくわずかな、元中期以前の印本である。他はすべて明嘉靖一〇年までの南監修本で、ここにはすでに原刻葉が絶無であり、それでも完本の現存はせいぜい一〇部ほどかと思われる。

存一六巻（巻三五～五〇）　至元前期遞修　五冊

中央図書館（北平）蔵

改装後補紫色表紙（三三×二一・四チセン）、槐紙を入れ、包背装。題簽は「北斉書十一　列伝廿七之冊」（墨書）から始って、冊次が一五まであるから、この本の改装時、おそらく明代の後半には全五〇巻一五冊の首尾完好本であったと思われる。

原刻の残葉は、巻三五の全九葉をはじめ、この残一六巻の合計二三七葉中、六六葉に及ぶ。当然のことながら、その多少には変化があって、全一〇数葉がすべて補刻という二巻まである。補刻は南宋中期と元前期の両度のもので、前者が一二五葉、後者が二八葉である。南宋中期の補修が大規模のもので、原刻の過半を新版とさしかえたことがわかる。

原刻の漫漶はかなり進んでいて、百衲本はこれを多分に加筆修正しているが、巻四〇第一葉の刻工の陳立の名を落しているほかは、とくに甚しい差異を生じてはいない。補刻についてもほぼ同様で、陳書での知識によれば、両期のそれの判別は百衲本によっても容易にできる。

これらを後掲の明嘉靖修本と較べると、この本が元中期の補修の直前の印本としても、それからさらに二三〇年ほどは経ているから、原刻葉がすっかり消え失せてしまっている。南宋中期の補刻刻工の名は数名が残っているが、漫漶が著しいながらどうやら南宋中期葉といえるものが二、三葉で、版面の四周などを大きく部分的に補修されながらわずかに宋版の面影をのぞかせるのが六〇葉ほどある。部分補修は元初修葉にも及んでおり、元初修葉が嘉靖修に改められたのも二例ある。

この本の原刻の多くは元中期の補刻の際に廃されたが、いま嘉靖修本には嘉靖八・九・一〇年の補刻葉に代っているのが一七葉ある。一葉が元中期、嘉靖と再度にわたって補刻される場合もありえなくはないが、その大半はおそらく嘉靖修の際まで、実に三五〇年ほどを生きのびたものであろう。

「橋氏／家蔵」と「京師図書／館収蔵」の両印がある。

周　書

周書は百衲本もすべて嘉靖修本で原刻葉がすでにないが、その張元済の跋に、涵芬楼に「宋刊之葉尚存什之七八」という善本が二部あったが、付印の直前に上海事変で焼失したという。いま天理図書館蔵の零本一冊が、おそらく唯一の元までの修本であり、他は三朝本となって至嘉靖修本である。ただし、周書に限らずそのほとんどすべてが万暦ごろの後印本と思われるのに、百衲本の底本とされた当時呉集潘氏范硯楼蔵本は、嘉靖の補修後まもない印本かとみられる。

零本（存巻四四（末一葉）・四五・四六（首八葉））　一冊
　　至元中期遞修　　天理図書館蔵

改装後補濃紺色絹表紙（二二×一七・一センチ）、金譲玉装（料紙の高さ二六・二センチ）。

巻四五は全一八葉で、合計わずかに二七葉の端本である。そのうち巻四五第一五～一八の四葉が原刻で、他は南宋中期修四葉と元前期修九葉、そして元中期修葉である。そのため、表に明らかなように、原刻刻工はわずかに一名を見出すにすぎない。百衲本では、この原刻葉がすべて嘉靖修に代っており、南宋中期修の二葉と元初修の五葉がやはり嘉靖の補刻である。したがって嘉靖以前の印本であることは当然であるが、静嘉堂の陳書と同じく、元末ごろとみてよかろう。

先に触れたように、百衲本は嘉靖修本ながらそのごく早印本を影印しているらしい。これは呉県潘博山范硯楼蔵本で、一部を張元済自蔵本で補ったらしいが、張跋に版心にすでに剜去ありという通り、上象鼻の嘉靖八・九・一〇年の補刊記がすべて削りとられている。わが国にある数部はすべて万暦ごろの後印本で、それらではこの嘉靖修葉の字画がかなり細いのに対して、百衲本の方は、文字の特徴は完全に一致するから異版ではありえないが、当初は補写かと見まちがえたほどに肉太である。それで推測であるが、影印の際に加筆修正を施してなければ、張氏が世に少くない嘉靖修本のなかでわざわざ潘氏から借りたことをみても、嘉靖修後まもない印本ではないかと思うのである。

以上、南宋前期杭州刊の七史について述べてきたが、このほかに宋元刊本の現存するものはない。七史としては、北宋嘉祐中にはじめて刊刻されたものと、眉山七史の誤解のもととなった南宋紹興中井憲孟刊本とが実在したわけであるが、この南宋前期刊本が明の万暦中に南京国子監で改雕されるまで、この三本以外にはまったく痕跡さえないのである。

正史の合刻本は北宋で順次、刊本とされ、南宋初におそらくそれが覆刻されたあとは、南宋前期の建刊風の一四、五行本がいくつかあり、南宋中期建刊一〇行本に至る。これは黄善夫の史記にはじまり、劉元起・魏仲立ら刊者の名に変化はあるにしても、五代史記までの十史があったらしく、やはり合刻本とい

えよう。元に入っては、大徳九・一〇年ごろ江東建康道肅政廉訪司管下の九路儒学本になるが、これも漢書などの序に十七史というものの、南北朝七史の存在は考えられず、南史・北史で事が足りるということで結局、十史に終ったものと思われる。

そのために、この七史が、南監二十一史にも補修を重ねながら用いられ、蓬左文庫本の魏書が一葉だけながら万暦一六年に補刻されたことを示すから、実にそれが四五〇年以上に及んだことになる。その間にむろん原刻葉は失われ、補刻に際して漫漶が甚しくても参照すべき別本はなかった。もともと北宋の開雕時に七史はテクストが乏しく、とくに魏書などは全巻が揃わないで、校訂が不完全であったが、加えてこの実情で、南京国子監で新たに万暦本を刊行するについて、その序に校正の困難を嘆いている。それでも、万暦二～五年の梁書にはじまって、一六～一八年に陳書・周書・北斉書・南斉書が、二五年までに宋書・魏書の新版が完成した。

しかし、少からぬ誤字誤脱が黙殺されたのもいたしかたなく、南監本以降の本文は劣る。もっとも現存の南宋前期刊本に欠葉のところを、南監本から南北史等で補っている箇所もある。

このような点を考えれば、張元済氏が一九三〇年代に、元修までの、やむなくば至明初修の善本を集めて百衲本に集成した意味は量り知れないものがある。それだけに、本文中に指摘したように、底本の採択にもうひとつ統一性を守ることが欠け、その注記が不十分であり、明初修葉の使用に注意が不足したことなどが惜しまれてならない。

四　隋　書

隋書は元刊本が主流で、百衲本も大徳刊本を採用したとしているが、これがなかなか複雑な本で、以下に詳述することになる。一方、宋刊本も伝存がごく稀ながら二種ある。北京図書館蔵本についてはまだ実査する機会を得ていないので、書目書誌によって記述する。

南宋前期刊一四行本

一は、北京図書館善本書目に、

存六五巻（巻一～九・一三～一五・一九～二六・三二～七六）　宋刻遞修本　一二冊　沈曾植題款

とあるものであるが、このうち巻一三～一五の三巻を除くと、雙鑑楼善本書目の

存六二巻（紀一～五・志一～四・一四～二一・二七～三〇・伝一～四一）　北宋刊小字本

の巻次と一致する。これはこの本に志一三～一五の三巻が加わったものと見てよかろう。

北京書目では行格がわからないが、雙鑑楼書目によって、一四行・二五字・注雙行三〇字・白口・左右雙闌の小字本と知られる。これから推定して考えられるのは、南宋前期の覆北宋刊本か、同じ前期の建刊本の二本で、そのいずれかと思われる。

前者は端拱・淳化年間の牒や官銜を伴う五経正義や、両唐書・通典などの類で、一四～一五行、おそらく北宋代にはじめ

て刊刻されたものの覆刻本であろう。しかし、南北史のところで述べたように、また天聖二年の牒が残っているように、隋書は天聖年間に南北史とともに校勘・刊刻されたのであるが、南史の南宋前期刊本（金沢文庫本）や七史が九行本であるところをみると、直ちにこれには結びつけにくい。

もう一本は、たとえば王叔辺刊の後漢書のような一三～一四行本で、中国版刻図録（図一六〇）はこれを「書体秀媚、字近瘦金体、南宋初葉建本風格」と称しているが、正史ではこの系列に史記（同図一六四）、唐書（同図一六六）、晋書（百衲本）、それに王叔辺刊本とは別版の後漢書（京都大学人文科学研究所蔵）等がある。ともかく実査すればわかることで、その機会を待望している。

南宋中期建刊一〇行本

宋本の第二は、一〇行一九字の南宋中期建刊本である。ただ、実在が確認できるのは、左の八巻にすぎない。

存巻九・一一（礼儀志四・六）　二冊　中央図書館蔵
存巻一〇（礼儀志五）　一冊　中央図書館蔵
存巻二四・二五・八三～八五（食貨志・刑法志・伝四八～五〇）　二冊　北京図書館蔵

中央本は同図書館の宋本図録（図五〇）と中国訪書志（13C八二頁）（増訂本四四五頁）に解題されている。前者は新補茶色表紙（二五×一九・五センチ）、槭装。後者は濃藍色絹表紙（三〇・九×一七センチ）、金譲玉装、原料紙縦二四・四センチ。本文巻首は「志第四（隔五格）隋書九」のように題し、左右双辺（一九・九×一二・五センチ）、一〇行・一九字。版心は線黒口・双黒魚尾・上または下象鼻に字数、左上欄外の耳格に篇名を刻する。欠筆は 弘恒徴勗 字にある。巻一一の尾第二五葉以下欠。蔵印は前者に「芙川張蓉／鏡心賞」（陰）「虞山張蓉／鏡鑒定／宋刻善本」「虞山／張氏」「蓉鏡」、「守学／好古」「日華／鑒蔵」「延陵／後裔」、後者に「劉世／珩観」「号之／泗侍」「之泗／経眼」「劉／之泗」（陰）「之泗／嗣守」、「公／魯」（陰）「公魯／校読」、「聖頤秘笈／識者宝之」「宋本」（楕円）「徐乃／昌印」「徐乃／昌読」、「鄧／邦述」がある。後者の巻頭、末に、辛未鄧邦述・戊辰徐乃昌・王申張元済、辛未劉之泗・顧則奐の手書題記等が添えられている。

北京本の五巻については、宝礼堂宋本書録の「隋書残本一冊」と、鉄琴銅劍楼蔵書目録の「隋書三巻（宋刊残本）」との巻次が一致するから、この二冊が北京図書館に入って一本に合されたようである。前者によれば宋諱は 玄殷弘恒徴樹勗構敦 等の字が欠筆され、後者によれば後に無名氏の志序と天聖二年の勅があるという。

中央図書館の宋本図録に巻一一首半葉の、鉄琴銅劍楼宋本書影に巻八四首一葉の書影を載せる。ともに半葉一〇行、版心はやや不鮮明であるが、巻一一には字数や刻工名は見えず、巻八四には刻工名らしいものがある。いずれも典型的な南宋中期刊本の姿を示し、訪書志に建安魏仲立宅刊新唐書と行格が等しく、字様版式も相似するという。

このほか書目類にいくつか著録があるうち、涵芬楼燼余書録

の一五巻一〇冊は、他の涵芬楼本と同様に北京図書館に入っているかと思うのであるが、その善本書目に見えない。これは蔣衡の跋と数人の蔵印が同じことから、伝書堂善本書志に八五巻とあったものらしく、燼余書録によれば、張氏が取出して校閲中の帝紀五巻志一〇巻を除いて、日本軍の無法な爆撃に燬されたという。両誌とも半葉九行とし、雙鑑楼善本書目の宋刊元修本八五巻も九行とあるところを見ると、いささか不審ながら、巻頭の部分は九行であったものか。燼余書録に「行一九至二十一字不等、左闌外記篇名、細刻工、版心上下記字数」というから、この版本であることはまちがいない。

また、巻三末に拙老人蔣衡の小記があり、天聖刊本であるとしているともいうが、これは巻末に天聖二年の牒文があったことを示すと思われる。北京図書館現蔵の五巻には最終巻の巻八五が含まれるが、その旧蔵の鉄琴銅劍楼蔵書目録にも「無名氏序、天聖二年勅」とあり、函宋楼蔵書志の八五巻にもあり、元大徳饒州路刊本の早印本（南監二十一史以前の印本）にもこれが付いていたらしい。ところが元大徳本（百衲本）巻末のこれとやや異るのが、旧京書影に「元刻残本（240）巻八十五之十八・（241）巻八十九之十九」として掲げられている。八十九との誤植はともかく、巻八五第一八葉裏・一九葉表とみられるが、元刊本は第一五葉裏・一六葉表であり、行格も旧京書影は九行、字数は数えにくく五代史志の無名氏序の双行の注のところで二〇字のものが、元刊本は当然一〇行二二字である。そして、五代史志の無名氏序は前半が示されないから略すが、勅のところは旧京書影では次の通りである。

天聖二年五月十一日上　御薬供奉監元用奉伝
聖旨齋　禁中隋書一部付崇文院至六月五日
勅差官校勘（時命臣綬臣燁提点左正言直史館張観等校勘観尋為度支判官続命黄鑑代之）仍
内出版式雕造
廉訪司牒路准刊　書　吏　崔嘉（ママ）（改丁）
僉江西湖東道肅政廉訪司事
僉江西湖東道肅政廉訪司事
中議大夫僉江西湖東道肅政廉訪司事任
奉政大夫僉江西湖東道肅政廉訪司事聶
亜中大夫江西湖東道肅政廉訪司副使白
亜中大夫江西湖東道肅政廉訪司副使暗都剌
江西湖東道肅政廉訪使
江西湖東道肅政廉訪使

藝風蔵書続記の隋書の条の「元刊本毎半葉十行行二十二字」本は、堯学等の名も挙げるから、まさしく元饒州路儒学本であるが、右の通りのものを掲げ、百衲本や後述の中央図書館の八五巻四八冊本には、この後半九行の列銜がない。天聖二年云々とは、前述の通りこの年から隋書の校勘が始められたのであるから、それを証するまさに北宋天聖のものであろうが、列銜の方は官名といい、「暗都剌」の姓があることといい、元代のものであろう。とすると、この書影ではちょうど改丁のところで分けられるが、本来、別のものが併せて続けて掲げられていたことになる。後者が、ひとまずこの本の刊刻の際の官銜ではな

いかと考えるのが妥当であろう。すなわち、藝風蔵書続記の記事は解せないが、列銜の存否の両本は別本と見るのが当然である。そして、旧京書影本はその字様から建刊本とみえ、このように一部に九行のところがあって、雙鑑楼善本書目が九行としたのであろうと思われる。そうであるとすると、この本は提要に「旧清内閣蔵書見蔵北平図書館」とあることであり、北平図書館善本書目のなかで巻末を備える

宋刻明印本　存四〇巻（志一～四・一六～一九・伝五～二二・三七～五〇）

ではないかということになる。ただし、書影に見ると、字様も版心の形式も、似てはいるが南宋中期の建刊本ではなくて、晋書や唐書にもあるようにその元代の覆刻本であろうと考えられる。それは元の官銜があることによって裏付けられようし、北平目録が宋刻ながら明印本とし、旧京書影の提要も元刻本とするところに宋刊とは見にくい要素が感じられる。さらに、唐書の覆刻は元の天暦二年（一三二九）で大徳一〇年から二〇余年後であって、九路儒学本にない官銜が後に附刻されても不都合とはいえまい。つまりは、雙鑑楼善本書目著録本は南宋本かその元覆刻本かは未明であるが、南宋中期建刊本を元代に覆刻した本が存在するらしいこと、それも北宋天聖二年の崇文院の牒を具備していたこと、そのほかに元代の官銜を附刻していたことが明らかになるのである。といっても、元の覆刻が建安の書肆を用いて江西湖東道肅政廉訪司において行われたとはありうべくもなく、江西湖東道は元至順三年（一三三二）に隋書を刊刻したという瑞州路を管轄するところなのである。瑞州路刊の隋書については、次の元刊本の項の最後に述べるが、この官銜はおそらくその隋書のものであって、建安の書肆が、唐書の覆刻に遅れること三年、隋書も行うとして、ちょうど新刊の官刻本の官銜を借用して権威づけようとしたのではあるまいか。

もう一つ不審なのは、蔣跋に「惜内有南宋時補板十之一」（伝書堂志）、「補版為南宋所刻」（燼余書録）のようにあることで、雙鑑楼善本書目の八五巻にも「宋刊元修本」とあったことを思いあわせて、補刻と明らかな葉があったかということである。南宋中期建刊本正史には、晋書・新唐書・五代史記のように元代の覆刻本は別にあるが、後代の補刻の例はまだ見ないからである。皕宋楼蔵書志には「宋刊配元覆本」とある。蔵印は燼余書録に「葉氏／菉竹堂／蔵書」（葉盛）、「毛氏図／史子孫／永保之」、「開巻／一楽」、「宋本」「季振宜／蔵書」、「席鑑／之印」「席氏／玉照」、「張印／月霄」「愛日／精廬／蔵書」を掲げるほか、伝書堂志に「呉尉光印」「林橋」もある。雙鑑楼善本書目の八五巻、皕宋楼蔵書志の八五巻、天禄琳琅書目の八五巻六〇冊（毛晋・季振宜旧蔵）はいま所在を聞かない。

北平図書館善本書目に宋刻明印本の存四〇巻（志一～四・一六～一九・伝五～二二・三七～五〇）が著録されたが、旧京書影に宋刊本は掲載されず、いずれの版本か想像がつかない。

元大徳饒州路儒学刊本

元大徳九路儒学刊の隋書は、序文を欠き、とかく瑞州路刊と

誤り伝えられるが、版心上象鼻に「饒学」等とあって、饒州路の担当になったことが明らかである。万暦二二、二三年の改刻まで、南監二十一史にも用いられ、百衲本にも底本とされたから、南北史同様、なじみは深い。ただし、元末明初ころの覆刻本の存在することがこのたび確認され、百衲本は両本を混えているから、このすべてが饒州路本なのではなく、また瑞州路本は別に存在する。

したがって現存本の多くは至嘉靖一〇年の南監修本であるが、元末・明初印の善本がごく数本あり、その中で台北の中央図書館蔵の存経籍志二～四の二冊の零本は、中国訪書志によれば、原刻で印面も美しいとされるが、わずか三巻に四葉もの欠葉があり、最末葉、すなわち巻二五第三五葉は明らかに明初ごろの補刻葉である。それより、同じ中央図書館（北平）の存三五巻の方が、補刻葉はなく、元末ごろの印本とみられる。これは首七巻を欠いているが、もう一本は経籍志と同じ明初修本で首尾完好である。しかし、この本は覆刻本を随所に混配している。いずれにしても、これらに共通する原刻についての版式上のことどもを、まず記述しておく。

首に隋書目録（一九葉）。本文首題は「帝紀第一（隔七格）隋書一／（低三格）高祖上（隔三格）特進臣魏　徵　上」。四周双辺（二一・八×一五・四チセン）、一〇行二二字。版心は線黒口で、魚尾は単～三の各種があり、題もさまざまであるが主に「隋帝紀一（丁付）」のようで、上象鼻に担当の州県学・書院名と字数を、下象鼻に刻工名の入ったものがある。これらは後に表示する。巻末に無名志跋と天聖二年勅付崇文院校勘雕造題名六行とを附刻している。

学校・書院名と刻工名は、すでにかなり刪去されているのか、あまり多くない。まず学校・書院であるが、饒州路には鄱陽・徳興・安仁の三県、余干・浮梁・楽平の三州が属し、それぞれの路学・県学・州学が校正を担当したようであるが、その名のあらわれない県州もある。左にそれらを掲げ、当該あるいは所在の県州名と、隋書八五巻中のどこにそれがあるかを下方に記した。一巻内に二ないし三の地名があらわれる場合もある。

堯学　饒学　路学	饒州路学	ほぼ全巻（除巻36 3716 40～4118）
泮　番泮　堯泮	鄱陽県学	巻七・九・一一・一二・一五・一九～二六・三一～三五・六四・八二・八四
余干　餘干	餘干州学	巻三～五・一四
楽平　条平　平州	楽平州学	巻四・一四・二八・三〇
浮学	浮梁州学	巻五五～五七
初菴書院	徳興県	巻一六・二八・三四・八〇
忠定（書院）	餘干県琵琶州	巻四・一九・三八～四〇
錦江（書院）	安仁県	巻三六～三八・四〇・四一
長蒲（書院）	浮梁州景徳鎮	巻七・一五・二〇～二六・三二・三四・三八・六四
双溪		巻六三

刻工名は次の通りである。地名を冠するものはその形で示した。

2丁九三　丁務成　丁義之　丁福　丁応　丁礼之3子芳
子栄　4元秀　元明　昌江斗翁　王三　王子安
金川王永　金川王永寿　王林甫　金川王徳元　5付一
付正父　付正甫　可言　玉甫　6仲華　安元　安清
安貴　朱元秀7何璋甫　呈南翁　呈美仲　呈道　周元信
金川周元信8金川季七十　宗瑞　9南翁　珍叟　胡寿之
范玉甫　美中　11梓之　陶吉　12昌江禰梓程南翁　道鎮
昌江程道鎮　貴邦　貴和　13洒州楊魁伯　魁伯
15徳元　竜湖劉元明　16盧柴道
丁　万　彡　中　之　仁　元　王　文　斗　方　木　午　王
包　正　永　立　生　仲　共　同　朱　成　臣　伯　呈　宗
志　杉　肖　言　叔　季　宜　忠　林　東　明　信　洪　珍
南　柴　海　常　清　祥　華　傅　椎　程　童　紫　裕　道
費　栄　徳　厳

刻工名に冠する金川、昌江、洒川等の地名については、南北史のところで考証しておいたが、ほとんど現在の江西省北半、かつ鄱陽湖の東側で、当時、いずれも江東建康道に属していたと思われる。ここで新たに竜湖が加わっているが、これは鄱陽湖のほぼ北端にある。ただし、昌江の禰梓という細かなところまではわからない。

金川王永、金川王永寿、洒州楊魁伯は北史の刻版にも参加していた。

明初の補刻は一本を除いて行われているが、従来、この刻工は、覆刻本のものとともに、原刻と区別されずに混同されていた。しかし、次の項で証明するように、補刻であることにまちがいない。この期の補刻は量的に少く、めだたないが、気をつければ一見して明らかである。刻工は南北史、唐書など九路本の各史とほとんど共通し、元代後半に集慶路に十史の版木が集められた以後のものであることを示している。

〔明初〕補刻

4王安　6朱禾　朱伯禾　朱伯和7伯上　伯禾　呂茂
11張伯上　張伯濊　張克明　張清之　章良之12傅継之13楊茂
14趙伯　趙伯川
士　王　可　朱　伯　呂　張

以下、各本について述べる。

存三五巻（巻八～一〇・一三～一六・一八～二六・三六～五〇・六〇～六三）　一三冊

〔元末明初〕印　中央図書館（北平）蔵

赤茶色表紙（三〇・七×一九・八センチ）、第二冊以下に「隋書」の大型の印刷題簽（外郭二〇・九×三・九センチ）があり、郭内の右下方に「志八之九」のように墨書されている。粘葉装。

版心上下象鼻の字数、学校・書院名、刻工名などは、百衲本と較べてはるかに多く残っているが、一部に墨釘にしたところがある。この残巻には、元末明初の刻工名は見当らず、多くの巻の首尾などに「広智退隠」「観書以進徳也竊／書虧徳幸勿為之」の元末明初印本にまま見られる墨印があって、墨釘は補修の結果であろうから、厳密には元末の修本であると思われる。さらに、装訂は題簽を含めて、あるいは明代に入って南監のも

のかとも見受けられる。

さて、この本の巻一三第八葉はむろん原刻で刻工名が「金川王徳元」とあるが、次々掲の八五巻四八冊本では補刻葉に代って、刻工は王安である。同じく一五・一六・二一葉も、金川王永が補刻の章良之に改っている。先に表示した明初刻工とは、これらと一連のものである。このことは、唐書には鮮やかな原刻本があるので、さらに明白となる。

「京師図書／館収蔵之印」が捺されていて、百衲本の底本に用いられているらしいが、補刻がない唯一の本にもかかわらず、存三五巻のごく一部だけのようである。

旧京書影（239）に巻九尾の半葉余があり、「広智退陰」等の墨印も写っている。

存三巻（巻三三～三五 経籍志二～四）〔明初〕修　二冊　中央図書館蔵

後補紺色表紙（三二・六×二〇・三センチ）、一部裏打。ほとんど原刻であるが、最末葉、すなわち巻三五第三五葉が刻工章良之で、明初の補刻である。巻三四第一三葉、巻三五第二・七・二六葉が欠葉で、その一部は次の修本、つまり次掲本では修補されているから、この印行時に版木が破損していたのであろう。巻三五末に「蓉鏡／珍蔵」印がある。

元後期覆元大徳饒州路刊本

饒州路刊の隋書に覆刻本のあることは、いままでまったく指摘されたことがない。次掲の存四七巻の残本は、中央図書館善本書目に瑞州路刊本と誤記されるのは他の本と変りないが、前述の二本と同じ饒州路刊本とみなして異論がなかった。行格はまったく共通し、字様も極似しているからで、ただ「饒学」のような学校・書院名と刻工名がきわめて少いが、私も一〇年前に見たときには、補修によって刷去されたものと思っていた。しかし目録・巻一など冒頭のごく一部を百衲本と較べたところ、文字の異同がわずかにあって、いささか疑問を抱いていたので、今回の渡台の折に再調査すると、元後期の覆刻本であるとわかった。

また、その次に述べる八五巻四八冊本を実査して、明の初期または前期から、饒州路刊本とその覆刻本の版木が合わされて、一本として印行されたらしいことが明らかになった。したがって明の南京国子監印の隋書は、嘉靖修のその二十一史本も当然のことであるが、これを元大徳饒州路刊本の修補本とするだけでは誤りで、この両者の混配本なのである。したがってここでは、饒州路刊本の次にこの覆刻本をとりあげ、さらにその後に明代印行の混配本に言及することにした。

存四七巻（巻一～五・二四～二九・三一・三五 ～四六・五〇～五三・五八～七六）　一七冊

〔元後期〕覆元大徳饒州路刊本　中央図書館（北平）蔵

藍色表紙（三二×二六・八センチ）、第二～五・七冊に双郭に「隋書」の印刷題簽（外郭二〇×三・九センチ）がある。元代には遡らず、明の南監のものと思われるが、そうであるとしても、次の洪武公牘紙の混配本より早印であるから、ごく初期のものとな

る。第六・一七冊は後補紺色表紙。いずれも粘葉装。

巻一首題は饒州路本と同じ形式であるが、「魏　徵　上」とある空格が詰っていること、この首葉は同じ双辺であるが、匡郭が縦横とも数ミリずつ小さいこと、などの多少の相違がある。そして、饒州路本の大半が四周双辺であるが、この本は逆に以下はほとんど左右双辺であり、百衲本に覆刻本もかなり含まれているが、その左右双辺のものはほぼそれとみてよい。

行格がまったく等しいうえに、字様もまことに巧みに似せてあり、とりわけ特徴ある文字にそれが顕著であるから、対照してもなかなか差異を見つけにくい。しかし、目録のとくに小字双行のところに墨釘がめだつように、本文中にもその箇所が少しくあり、誤字もある。たとえば目録第一四葉裏、巻七〇列伝の楊玄感附の斛斯政・劉元進の名が、欽・振と誤られている。特定の葉に集中する傾向があるようであるから、底本が痛んでいたからであろうか。

比較的相違するのは版心で、題がときに、魚尾の数と形がしばしばで、字数を離らない場合も多い。

版心に学校・書院名を刻するのも稀で、巻五九第五・六・九・一〇葉と巻六四第一三・一四葉に「堯学」、巻六三第五・六葉と巻七六第四一葉に「番泮」がみえる程度であるが、まことに稚拙であり、饒州路本の原刻葉と較べると、原刻の右の各葉にはそれらの文字がなく、とくに巻六三・七六の番泮は、前掲の表に明らかなように、番泮すなわち鄱陽県学の担当ではないらしい。つまり、これは饒州路本のかなり忠実な覆刻本であって、おそらく饒州路以外の、あるいは西湖書院またはその周辺で行われたかと推測されるのであるが、その際はこれらを省くのが原則であったのに、原本にはあちこちに散見するものだから、この数葉だけ刻者が戯れたのであろうとしか考えられない。

刻工名も少いが、次のようなものがある。

3士中　4方亨　王思明　王徳明　5可川　丘挙之　6朱元
8東干　東虞　9思明　10徐乂山　徐艾山　時子栄　11陶士中
12湯景　湯景先　15蔡元　鄭必清
之　士　子　亢　仲　关　羊　麦　周　杭　孟　匋　明　東
耑　孫　時　參　景　彭　楊　鄭

これらは饒州路本の原補刻にはみられないもので、別版であることは明らかである。このうち、士中　王徳明　丘挙之　朱元　徐艾山　は、両淮江東転運司刊三史の元第二次修の刻工と同人であるから（史学四六―三五〇頁）、元の中期から後期の刊刻となる。饒州路本との関係、右に述べた版式などを綜合して、私は後期の刊と見る。

一部の巻がやや破損していて、そのため巻三一第一・二・五・九・一〇葉、巻七五第一・一七～二二葉、巻七六第一～六・一四・一八～二〇葉などが欠葉である。

各冊首に「晋府／書画／之印」、尾に「敬徳／堂図／書印」印が捺され、明の晋荘王鍾鉉旧蔵。百衲本の巻六八首・七四尾にこれがみえるから、その一部に用いられたらしい。他に「京師図書／館収蔵之印」「国立北／平図書／館収蔵」印。この印か

ら、旧京書影（237）（238）がこの本であると知られる。

元大德饒州路刊本
元後期覆饒州路本の混配本

以上に述べた饒州路刊本とその覆刻本の版木が、明初にともに南京国子監に収められていたらしく、両者から良版を選んで一本として印行されるようになった。これは、洪武末ないし永楽初の印本から確かめられ、嘉靖の南監二十一史本がこの混配本である。したがってこれが発足したときに、饒州路本はすでに明初の補修を経ていたと思われる。以下にこれを説明してゆくが、補刻についてはこの明初修以後のものだけに触れることにする。

八五巻　〔明初〕印（巻四二～四四補写）　四八冊　中央図書館蔵

後補砂子散桃色表紙（二八・三×一九センチ）、櫬装。

目録からして、第六・八～一四・一六・一八・一九葉等に覆刻本が混っているように、一巻のうちに所々にそれが挿入される場合が、少くとも二〇巻はある。そして後半に至って、巻五八～六六・六八・七〇～七二・七四～七六の一六巻は、全葉が覆刻である。後述するように、この本には明洪武公牘紙の紙背を利用した葉が多く、紙質もやや白っぽくて明らに異るものであるが、右の一巻全葉の場合を含めて、これはすべて覆刻本が刷られているから、饒州路本の欠巻をこれらによって補配したものか、と思えないでもない。しかし、覆刻本が一巻のうちの所々に挿入され、しかも洪武洪牘紙でなくて、その前後の饒州路本とまったく同じ紙質の葉もあって、欠巻・欠葉を後補したとはとても思われず、当初から両本を適宜混配して印行したとしか考えられないのである。

そこで、このあとの印本、つまり嘉靖一〇年前後の修の南監二十一史本を見ると、刻工名の大半はすでに消えているが、それでも饒州路本の原刻の付一貴邦貴和、同補刻の趙伯、そして覆刻本の士中方亨王德明徐文山の名があり、それぞれの所在箇所はこの本のものと同じである。すなわち南監嘉靖二十一史本も混配本であり、明初ごろのある時期に、饒州路本と覆刻本とが、おそらく南京国子監に集められ、前者に補刻を要する版木があったが、両者の行格、さらには字詰も共通するために、両者を合わせ、版面の状態のよいものを選んで一本としたのであろうということになる。

紙背文書は明の洪武二年から少くとも一一年までの黄冊で、「浙江等処行中書省劄……」「合州府帖文……」「台州府帖文……」等の文字も見え、また「稔粮黄冊里長甲首輪（以下欠）」と大字で題を、そして縦九、横四段以上に枡型に仕切って、縦の段には「洪武二年甲首」、横の段には「洪武二年」のように毎年代を印刷した用紙に、氏名を一人づつ墨書したものもある。数量もかなり多くて貴重な史料と思われ、中央図書館の劉顕叔氏が研究する希望をお持ちなので、その成果を期待するものである。

したがって、この文書を紙背とするからには、この本は洪武末あるいは永楽以降の印本とみるのが妥当であろう。それ以前に饒州路本とその覆刻本とが混配本されていなかったとは、必ずしもいえないが、およその時期はこのころと想定して、大きく誤らないと思う。むろん、その次の補刻年記の正徳一〇年にはとても降るまい。その点からも、この紙背文書は意味をもつ。

愛日精廬蔵書志に、八五巻、元刊本で、「紙背係洪武初年行移文冊」という本があり、天聖二年勅付崇文院校勘雕造題名を付するとされる。この本とまさに同類であり、あるいはこの本そのものであるのかもしれない。

表紙見返しからさらに四葉にわたって陸心源題三則、続いて趙列文題一葉、巻二二末に趙棻玉観款があり、全文が静盦漢籍解題長篇（第一巻八五頁）と中国訪書志（一三C八二・増訂本四五五頁）に転記されている。補刻が比較的少くて、首尾完好であり、巻末に無名氏跋と天聖二年の校勘雕造題名を備えるために、このように珍重されたのであろう。しかし、大徳（饒州路）本と覆刻本が入りみだれていることにはだれも気付いておらず、むしろ瑞州路本との誤解が述べられている。

そのなかでも、儀顧堂題跋に「元初饒州……為州、仍隷瑞州始。至元十四年、饒州始升為路。隋書刊于大徳乙巳、故仍隷瑞州」というのは、浙江帰安の陸氏にしてまことに囈言を弄したもので、神田喜一郎氏らに極評されている。至元一四年に路に昇格したことは、元史地理志そのほかに明記されているが、これについては中国訪書志にも誤りがあって、饒州は瑞州路に属していたのではない。宋代に饒州は江南東路、瑞州は江南西路の管下で、直線距離にしても一五〇キロほどを隔てているが、この地方は至元一三年に元軍の平定するところとなり、一四年に行政区画が確定して、瑞州も同時に路となったものである。

蔵印は、張燮・張蓉鏡・姚畹真の張氏一家のものが例によって多種あり、他に銭大昕、宗源瀚らの印も捺されているが、国立中央図書館金元本図録・静盦漢籍解題長篇・中国訪書志に詳記されているから、この三書に委せてここには省く。

八五巻　〔明正徳以前〕印　二〇冊　中央図書館蔵

後補茶色表紙（二八・三×一七・七チセン）、白綿紙本。中国訪書志に「〔明〕遞修」とし、補刊年記がすべて剜去されているが、その前の明正徳修本三〇冊とほぼ同程度の修印とされている。（C85頁下段・増訂本457頁）。「張印／鈞衡」（陰刻）「石銘／収蔵」「呉興張氏適園収蔵図書」「択是居」（楕円）「遊圃／収蔵」印。

同図書館善本組の李清志氏が精査し、教示されたところによると、この本にはなお、正徳の補刻年記が二葉、嘉靖のものが三葉あるが、剜去されたものは三葉にすぎず、これらの補刻葉は紙色・紙質が全書と同じでなく、配補の葉であるという。そして、たとえば巻二八第八・二五・二六葉は嘉靖修本では正徳一〇年修であるが、この本では原刻であること、巻二六第三一葉は同じく正徳修葉のところが欠葉であること、嘉靖修本より原刻葉が多く、その補刻葉のところに、この本ではなお「堯学」

等の文字が残ることなども指摘された。すなわち、明正徳一〇年以前の印本である。

北京図書館善本書目には元・明初印本はみあたらず、上海図書館善本書目の九行二二字・元刻本というのは、行数は誤りであろうが、嘉靖修の及んでいない善本かと推察する。

以上のように、明の初期ないし前期に饒州路本とその覆刻本の版木が一つに合わされたあと、この隋書には正徳一〇年の補刊年記を刻する葉を三〇ほど含む本があり、その次が南監二十一史のための嘉靖八～一〇年の補修になるようである。正徳の補修を受け、かつ嘉靖以前の印とされる本の存在は、いまのところ確認されない。中国訪書志に、阮元等旧蔵の三〇冊本と呉興張氏適園旧蔵の二〇冊本をこれとするが、後者は前述のように正徳以前の印本であり、前者には補刊年記を剜去あるいは墨筆塗抹したほかに、嘉靖の補刊年記がなお五葉に残っていることを、同じく李氏が教示された。巻一第九、一〇葉が原刻であるのは補配とみざるをえないが、これは嘉靖修本なので後掲の表の中に含めた。

北史では、静嘉堂本に嘉靖一・二年の補刊年記があったが、隋書にはこの期の修は行われていないらしい。

嘉靖の補修は八・九・一〇年に行われたが、一二年の修が巻三九第七葉にただ一葉ある。これは前述したように、南京国子監二十一史の発足に際してその一に採用されるためにされたものである。したがってこの修本の現存本は多く、以下に所在の知られているものを列挙する。大陸所在本は未調査である。

二〇冊　二〇冊　二〇冊　内閣文庫　四〇冊　斯道文庫
二〇冊　書陵部（欠巻一九・二〇・六〇・七〇）一七冊　蓬左文庫
一二冊　大倉集古館（欠巻一九～二三）一八冊　東洋文庫
（存巻一一～二七）三冊（存巻二八～三三）六冊　故宮博物院
二〇冊（呉興劉氏嘉業堂旧蔵本）三〇冊（阮元等旧蔵本）中央図書館
四〇冊　中央研究院歴史語言研究所
四八冊（公文紙印本）二〇冊（巻五七配清抄本・巻五八～六三配元至順三年瑞州路儒学刊明修本）
二〇冊（涵芬楼旧蔵本）北京図書館
二〇冊　二〇冊（存巻六～一二・二四～三五）六冊　北京大図書館
二〇冊　二〇冊　南京図書館（末八部未調査）

このなかで、北京図書館の二〇冊は涵芬楼燼余書録著録本で、「有明正徳嘉靖補版。毎冊前後均鈐南京国子監官書記木印」という。百衲本はわずかにこれを用いたらしく、巻五九尾、六〇首、七九尾に「南京国子／監官書記」印が見え、巻二二第九・一〇葉に嘉靖八年修があって、その印影が非常に鮮明であるから、南監二十一史成立のときの初印本を国子監に収めたものではないかと想像される。

以後、嘉靖中および万暦の初期までのちょうど五〇年間に随時、刷られたもので、それぞれに印行の時期が異り、版面の摩

滅の程度に多少の差がある。内閣文庫の三部のうちでは、平泉鄭氏・寛永寺勧学寮旧蔵本が、漢書・晋書に嘉靖四四年の鄭履準の読識語があったように、やはりもっとも早印本である。毛利高標旧蔵本の料紙には、嘉靖二六年八・九月の年月と「結人陳軒」「結人肖智」などの墨書が見え、嘉靖三〇年前後の印かと思われる。

そして、東洋文庫本の巻七四第一一葉に万暦丁亥年（一五年）の補刻年記があり（刻工銮）、隋書は同二二・二三年に新版に改雕されたから、その直前までわずかづつ修刻を加えつつ印行していたことが知られる。さすがにこの本には、版木の破損の甚しい箇所が目立つ。

元大徳の原刊以来、嘉靖の補刻時まで二二〇年を経ているが、原刻葉の残存はかなり多く、過半をはるかに越え、漫漶もたいしたことはない。しかし、版心の学校・書院名と刻工名は大半が削去され、わずかに 堯学 番泮 条平 楽平 錦江 浮学、貴邦 貴和 趙伯 徐艾山 士中 方亨 付一 乂 士 方 仁 付 臣 匋 孫 道 学 艶 等の名がごく散見するだけである。刻工名が、饒州路本の原刻と補刻、覆刻本の三者のものであることは前述した。それに冠する金川 昌江 龍湖などの地名はもはやまったく残っていない。巻末の無名氏跋と天聖二年勅は、欠く本もあるがだいたい付いている。

明代の補刻年記は正徳一〇年、嘉靖八・九・一〇・一二年のものがあるが、嘉靖八年の刻工に 徐英 陳朴 がいる。

百衲本

百衲本隋書は、残巻の少い宋刊本でなく、元大徳刊本を底本とし、「上海涵芬楼影印元大徳刻本並借北京図書館江蘇省立図書館蔵本配補」という。まず自蔵本、すなわち燼余書録所掲本を基本としたわけであるが、前述のように、張氏は未知であったが、これは大徳中饒州路刊本とその覆刻本との混配本であり、さらに明の嘉靖一〇年にまで降る補修本であって、正徳修葉が約三〇、嘉靖修葉が七〇葉ほどもあるはずであるから、底本としてすこぶる適切ではない。そこで他の二図書館本でその短を補おうとしたのであろうが、涵芬楼本には二〇冊の毎冊首尾に南京国子監官書記印があるはずなのに、百衲本では巻五九尾・六〇首・七九尾の三箇所にしかみえず、嘉靖修葉は八年の補刻年記が巻二二に二葉あるだけで、正徳一〇年の修葉もまったく含まれていない。

北平本は、京師図書館印だけ、すなわち饒州路刊の一三冊本のものと思われるものが巻四七首にあり、覆刻の一七冊本の晋府書画印および敬徳堂印が巻六八首・七四尾にあるから、両本とも用いられてはいるようである。しかし、この計三印というのは、その冊数の首尾にそれぞれ捺印されている実際からは、あまりにかけはなれている。

巻七七尾の判読不明の小型三印が江蘇本のものかと思われるが、江南図書館善本書目や江蘇省立図書館図書総目の著録は、二〇冊・元大徳瑞州路刊本とあって、瑞州路との誤りはともか

く、他の本には明修と記しているのがここにはないから、少くとも嘉靖八～一〇年の補刻年記がないのであろう。しかし未調査なので、先の嘉靖修本の現存表に南京図書館蔵として入れておいた。

いずれにせよ百衲本は一見して覆刻葉が多く、張氏がその認識のないまま、覆刻本をしきりに採って、嘉靖修葉と取りかえたのであろう。その結果、嘉靖修葉は二葉に減ったが、饒州路刊本にせっかく残っている地名を冠した刻工名の潤州楊魁伯 金川周元信 はあるが、金川王永寿 金川王徳元 昌江禰梓程南翁 龍湖劉元明 などは出てこない。ともかくも、原刻で版面の状態もさほど悪くない本が三五巻も存するのに、これをごく一部しか用いないで、覆刻本を主としているのである。しかも、私どもは閲覧に際して冊数の制限を受け、両本を同時に対照することを許されないが、張氏はおそらく北平本の両本を直接に比較できたのではないかと思うと、この選択にはまことに理解に苦しむ。

張跋には底本のことに触れず、元大徳九路刊本、とくにこの隋書について略述するが、当時は瑞州路説が横行していたにもかかわらず、「堯学路学即饒州路学」とはいいながらも、饒州路学刊とは一言もしていない。しかし、このような百衲本、それに基く校点本が一般に用いられることになれば、覆刻とはいえ、饒州路本とその覆刻本との校合をしておかなければならない。

張跋はそのあと監本、殿本との校勘記を掲げ、地名 人名 官名 物名 について、監本に誤りの多いこと、殿本は宋刊残本に基いたところは良いが、その欠巻は監本に拠ったために誤る例の多いことをいう。そのうちの特勒（特勒）については、校史隋筆では一項に独立させて詳しく考証している。

元至順三年瑞州路儒学刊本

瑞州路刊本についても、すでに神田喜一郎氏がかなり言及されていて（大徳九路本十七史考）、以下の記述も氏の卓見に負うところが大きい。

隋書の瑞州路刊本と称するものが、鉄琴銅劍楼蔵書目録・同蔵宋元本書目・皕宋楼蔵書志と儀顧堂題跋・善本書室蔵書志・芸風蔵書続記・伝書堂善本書志・中央図書館と故宮博物院の善本書目等にみえる。しかし、鉄琴銅劍楼本はまさに瑞州路刊本のようであるが、前述のように他は饒州路刊本である。中でも儀顧堂題跋・善本書室蔵書志・芸風蔵書続記は、版心に「堯学」「饒学」等の文字があることを指摘しながら、饒州といわずに瑞州とするものである。

鉄琴銅劍楼本については、蔵書目録に「元至順間瑞州路学刻本」と明記し、さらに同元本書影史部の四に、この本の巻一首一葉の書影が掲げられている。これは、たしかに饒州路刊本と別版である。

すなわち、この本を饒州路本の首葉を比較しながら見ると、次の通りである（饒州路本は括弧内、ただし小字双行の注は別）。瑞州路本は、左右双辺（四周双辺）、毎半葉九行（一〇行）

行二二字（同じ）、本文首題は「隋書巻之一／（低二格）帝紀一（隔五格）特進臣魏徵上／（低三格）高祖上」と三行をとるから（初行に小題上・大題上、次行に「高祖上　特進臣魏徵上」と二行）、字詰は同じながら、饒州路本より首葉表で二行少く、以下、半葉ごとにそれに一行づつ足した数だけ行が送られて行くことになる。つまり、覆刻の関係にはない。版心は、線黒口のようであるが、この葉には州県学などの名や字数はなく、双魚尾で、題は「帝紀　隋（丁付）」とあって（隋帝紀一（丁付））、やや変則である。第九行に「桓」字を欠画し（しない）、西魏の年号を「太統」とし（大統）、そのほか互いに異体字を用いるなどして多少の相違がある。字様はかなり似るといえる。

蔵書目録および宋元本書目に「与宋本式無異」とあるが、宋本とはやはり瞿氏蔵の南宋中期建刊本（存末三巻）のことであろうが（北京図書館現蔵）、これは一〇行一九字であり、これに元の瑞州路の官銜があるわけはなく、異らないのは天聖二年の勅が附いているくらいのことではないか。

鉄琴銅劍楼蔵書目録は続いて「校讐無譌、元刻中之善者、汲古本於経籍志、最多譌字、今拠是本全校之如」と経籍志を汲古閣本と対校し、その結果、瑞州路本 是、汲古閣本 非との例を八〇ほども挙げている。このうち二五は饒州路本とも異り、つまりは汲古閣本が饒本を踏襲しており、校点本も饒本を底本としたためであるが、ほとんど饒本の方をそのまま採っている。両唐志、日本国見在書目などに照して瑞本が正しいと思われるものもあり、細注に著録された本に「亡」字を脱するというのも瑞本に分がありそうであるが、本文の正否はすぐには決めがたく、いずれにせよ饒本と瑞本の間にすでにかなりの程度の相違が生じたことを示している。

ところで、北京図書館善本書目は、先の元大徳饒州路儒学刻本三部に続けて、明らかに区別して、この本を二部、

元至順三年瑞州路儒学刻明修本　二十冊

元至順三年瑞州路儒学刻明修本〔巻二十配元大徳饒州路儒学刻明修本〕李盛鐸跋　三十冊　潘捐

と著録する。とくに後者は饒州路本が補配されたとしているから、両本の相違はやはり歴然としているに違いない。そして、北京目録が至順三年刊と明記するのは、この本に次のような欧郷の周似周の序があるらしいからである。

十七史書、欠一不可。曩予（序）録廬陵郷校、有史記・東漢書、而無西漢。及長鷺洲書院、則有（僅）西漢一書而已。嘗嘆安得（安）江西学院所刊（書）経史、会為全書。今教瑞学、有通鑑全文、又在十七史外。至順王申夏、府奉（令）省憲命、備儒学提挙。高承事言　十七史書、善本（書）絶（極）少、江西学院、惟吉安有史記・事西漢書、贛学有三国志、臨江路学唐書、撫学五代史、余欠晋書・南史・北史・隋書。若令龍興（昌）路学刊南北史、瑞州路学刊隋書、便如其請、俾行之（無）丑怠。府委録事欧陽将仕、同召匠計工、周教授専校勘刊雕、提挙司（使）令自尋善本、今学（本）首訪到建康本十七史内隋書、攷（考）訂未免、刻画粗率、句字差訛。後得袁趙氏本頗善、然差謬亦不少、（以下一〇六字）

遂参究互攷、随事求証、誤者正之、訛者補之。予承乏于此、無所諉責窮詳。史未易言、太史公筆力如此。班固猶有是非、謬於聖人之譏。況降而東都、又降而八代之衰者乎。予観唐魏鄭公所上隋書帝紀列伝、固当別眼観之、若長孫無忌等所撰志、又自有不同者。（以上一〇六字）今所校定、凡千有余字、非敢僭妄、（以下三三字）皆信有徴、庶幾有益於後之覧者云爾、敢自附于能読史哉。欧郷周似周書。（以上三三字）

これはわが斯道文庫蔵の饒州路刊本とその覆刻本の混配本の至嘉靖一二年修本の巻頭に、おそらく清代のあまり遅くない時期に補写され、附綴されたものによる。孫毓修の中国雕板源流考（一九一八年初版）に引かれ、神田氏も用いられたものには、文中に傍点を付けて注記したような省略が後半にあり、撰者の名も周自周とし、傍記したようにやや文字を異にし、龍昌路などは明らかな誤りである。

いずれにしても、これは当然、瑞州路刊本の序であって、それがかって鉄琴銅劍楼本に、いま北京図書館の二本に実在するものであろう。斯道文庫本に附綴されたのも同じような理由によろうが、この序文を見た者の記録から、元刊本は瑞州路と観念が先行し、版心に小さな饒学の名はあまり顧られずに、数の多い饒本の方も瑞州路刊と伝えられるようになったかと思われる。

しかし、この序に明らかなように、大徳九年（一三〇五）から四半世紀も遅れた至順三年（一三三二）のことで、先には江東建康道肅政廉訪司の管内、すなわち鄱陽湖の東北側の地域であったのに、今回は江西湖東道肅政廉訪司の、つまり同湖の西南の地方が任に当っている。そして同道の一〇路のうち、すでに吉安に史記と両漢書、贛州に三国志、臨江に唐書、撫州に五代史があり、残りの晋書を龍昌、隋書を瑞州、南北史を建昌の各路が受持ったという。吉安の史記といえば、至元二五年（一二八八）の吉州彭寅翁崇道精舎刊本があるが、この本は慶應義塾図書館を含めて一〇余部も現存するものであり、官刻本ではないし、これがその史記に該当するか即断できない。まして、それに較べて吉州の両漢書の伝存を明代以来、聞いたこともないのが不釣合であり（鷺洲書院の漢書は宋嘉定一七年（一二二四）刊）、三国志・唐書・五代史記についても同様である。新たな晋書・南北史もそうで、わずかに瑞州路の隋書だけがこのように現存するもののようである。前述の南北史の覆大徳刊本は、明初、すなわちさらに三〇年以上も降るはずで、至順中建昌路刊本ではあるまい。そして、晋書の龍昌路とは龍興路（南昌）のことであろう。

いずれにしても、元至順年間ごろに、江西湖東道肅政廉訪司管内の各路で、序文中には一七史とはあったが、たぶん大徳の江東建康路と同じく一〇史が整えられ、その一の瑞州路の隋書八五巻がここに述べたものである。そして、巻末の無名氏序・天聖二年勅に続く、宋刊本のところで触れた江西湖東道肅政廉訪使以下の列銜九行も、北京図書館蔵本を一見すれば判明することであろうが、おそらくこの瑞州路本隋書のもではないかと思われる。